「夢を紡ぐ街　－ 東京 － 」

和紙と墨のアート　〜高濱武周〜

銀座

西郡 仁朗

本素材は２００３年度に制作されWEBで公開されているマルチメディア教材「夢を紡ぐ街 - 東京 － 」の続編として制作された。同教材については西郡（２００４）を参照されたい。

出演：高濱 武周（アーティスト）
　　藤本かおる（言語文化研究所）
制作スタッフ：
　　西郡仁朗（東京都立大学人文学部）
　　藤本かおる（言語文化研究所）
　　岩田　之男（言語文化研究所）
　　小松　恭子（科研費協力者）
協力：
　京都大学学術情報メディアセンター
　　壇辻正剛
　　坪田康
　　河上志貴子
　　津志本陽
　　川口亘代
　　福島丈司

文献：

西郡 仁朗 (2004)「新しい日本文化論と日本語教育のためのマルチメディア・コンテンツ『夢を紡ぐ街-東京-』の研究開発」文部科学省科学研究費報告書（基盤研究C(2)）『日本語中上級マルチメディア素材のデータベース化及び中国での利用展開』（研究代表者：西郡仁朗）,11-17

和紙と墨のアート　ー高濱武周ー

高濱武周さんは墨を使った美術作品を制作しています。もともと書道家の家に生まれ伝統的な書の道を進んでいましたが、いろいろな経歴を積む中で、書道の枠にとらわれない、墨を使った芸術作品の世界へと活動の幅を広げてきました。

実は高濱さんは中南米と日本との国際交流・技術交流の仕事もしていました。そこで得た国際的な視点は、高濱さんの作品のオリジナリティと深いつながりがあります。

今日は高濱さんにこれまでの活動と作品について語っていただきます。

司会：今日はよろしくお願いします。

高濱：よろしくお願いします。

司会：今、私たちの後ろには高濱さんの作品が映っています。もともと書道をなさっていたそうですが、現在は書というよりも絵画とお呼びした方がいいのでしょうか。

高濱：そうですねえ、えー、和紙と墨を使っている点では書と共通しているんですけれども、えー、書というのは現在読める文字を書くということが、一応その定義として存在してますので、そうであるとすると、僕のは、もう文字を書いていませんから、書ではないと思っていただいていいかと思います。

司会：書道をはじめたきっかけというのはどのようなことからだったのですか。

高濱：えー、実は父が、えー、書道家でしたので、えーっと、小さい頃から書を学ぶことは実に自然な形で僕は始めていたようです。そして、中学３年生の時には、えー、すでに父の書道教室の手伝いを続けていまして、小学生にその当時教えていました。

司会：自分で書いたり手伝ったりするだけだったんでしょうか。作品を展覧会に出したりすることはしていましたか。

高濱：そうですね、一年に一度父が主催する展覧会があって、そこには必ず出品していました。その頃はまだ完全に伝統的な書道の作品を作っていて、写経作品が主に作っていた作品です。

司会：では、子どもの時から書道家になろうと思っていたんでしょうか。

高濱：いえ、そういうことは全くなくて、その頃書道には全く興味が僕はなかったので、ほかに数学、特に、幾何学の世界がすごく好きだったのと、それから、あと、外国語の世界に、すごく興味がありました。

司会：ああ、それで進路として外国語の方を選んで、大学ではスペイン語を専攻されたんですね。スペイン語を選んだ理由は何ですか。

高濱：えー、直接のきっかけは、中学生の時に見た南米ペルーにあるマチュピチュの遺跡（司会：はい）の写真を見たことです。

司会：マチュピチュというとインカ文明の遺跡で、とても標高の高いところにある町の跡ですね。

高濱：そう、えー、山頂近くに作られたインカの遺跡で、えー、その独特の形状と、謎めいた雰囲気にものすごい強い衝撃を受けたのを覚えています。

司会：じゃあ、それがきっかけてスペイン語を。

高濱：はい、そうです。

司会：マチュピチュには行かれましたか。

高濱：はい、幸い、在学中にメキシコに留学する機会がありまして、その期間を利用して行くことができました。

司会：メキシコやペルーなどラテンアメリカから受けた影響はありますか。

高濱：たくさんあってとても一言では言えないのですが、一番強い影響を受けたことを二つ言うとすると、今を楽しんで生きるという、ラテンアメリカの人々の人生観ですね。それからもう一つは日本では経験できないような雄大ですばらしい自然の中に身をおけたという二つの事柄です。

司会：大学卒業後の就職はどうされましたか。

高濱：えーと、結局、国際協力事業団という組織に就職しました。

司会:今は国際協力機構と名前が変わっているところですねえ。JICA という名前でも有名で、いわゆる ODA、政府開発援助を行っているところですね。

高濱：そうです。えー、主な業務としては、開発途上国に対する日本の技術の移転、そして、無償で社会インフラの整備をしたり、開発計画の策定を行うところです。そしてその一環として、開発途上国から日本に人に来ていただいて、そして日本で技術の習得をしていただいて、それぞれの国で国造りに役立てていただくという仕事もしています。

司会：仕事柄、いろいろなところへ行かれましたか。

高濱：はい、実際に仕事をしたところは国内では、東京と沖縄、海外では南米のボリビアです。とても充実した仕事でした。

司会：その間も書は書いていたのでしょうか。

高濱：そうですね。就職して一人で生活するようになってからは自発的に毎日書くようになりました。当時は頭の中に理想の線が存在していて、この線をどうすれば現実に紙に書くことができるか練習しました。

司会：仕事でも充実していたそうですが、仕事を辞めたのはどういう・・・

高濱：えー、JICA の仕事はとても僕自身は好きで、充実していましたので、できれば辞めたくはなかったんですけれども、ただ、同時に、次の何かをしたいという気持ちがふつふつと湧いて来て、それを止めることができなくなって、それで、結局、次のことをやるために辞めようと思って辞めました。

司会：あー、で、実際に仕事を辞めてしまったんですね。

高濱：そうです。当時思っていたことは、書を使って何か国際的な活動ができないかということを考えていたんですけれども、まず、そのためには実態を知るべきだろうと考えて、大学院に入って、で、それをテーマとして研究してみました。しかし、研究は始めたものの先行研究が全くない分野で、全く暗中模索の中で、いろんなことを調べて行ったんですけれども、結果としては、書は、海外では教えられた事例はあるんですが、非常にそれは少ない事例で、しかも横のつながりがまったいくない状態で存在しています。それから、アートとして書が受け入れられたというのは事例としてはあるんですけれども、それもほんとに数少ない例しかなくて、ここ三十年はまったくそういう事例は存在していないです。

司会：何かそれは残念な気がしますね。

高濱：そうですね。とっても残念ですけれども、中国語の世界では、例えば中国語教育の一環で、書を教えて行こうということがネットワーク化されている事例がアメリカなんかにはあるんですけれども、日本語教育の関係では今のところ全く存在しないですし、アートとして書が海外で通用していないというか、受け入れられていないというのは、まあ、作品そのものに力がないということが一つの理由なので、それは、作る側には十分責任のあることだと思っています。

司会：書道も芸術、アートだと思いますが、漢字やかな文字、つまり、意味や音声を伴ったものが世界の人々に受け入れられるのでしょうか。

高濱：そうですね、過去の事例を見ましたら、漢字やかな文字を使った書の作品が、アートとして受け入れられている事例は十分ありますので、そのことで、えー、そのことだけで難しいということは僕はないと思います。ただ、１９５０年代、１９６０年代にかけて、欧米の、その当時の最先端のアートであった抽象表現主義ですとか、シュールリアリズムのアーティストと、日本の書家が交流をしたという事例は残っているんですけれども、そのころを境に、現在までの約３０年間は、書が芸術として受け入れられた事例はほとんどないです。これは作品の方にその力が足りないと僕は見てますので、えー、是非そういう力のある作品が、今後生まれてくることを僕は望んでいます。

司会：高濱さん自身の、書での国際的な活動という構想にもジレンマがありましたか。

高濱：そうですね、僕の場合には国際的な活動をすることに対して、ジレンマ云々というよりも、自分の表現を書を使ってやって行くことについてのジレンマはありました。そのジレンマを破るきっかけが二つありまして、一つは昔カナダを旅行していた時に、偶然カナダで売られていた世界地図を見たことがあるんですけれども、その世界地図は、北極を中心にした円形の、世界地図だったんですね。通常の世界地図は日本が中心になっているものを我々は見慣れているんですけれども、その地図は北極が中心になっている同心円上に国が配置されているような地図で、すごくインパクトの強いものだったんです。で、それを見た時に、直接にはわからなかったんですけれども、それがきっかけと

なって、僕は文字をすぐに書くということを捨てました。それでいろんな形で、文字をひっくり返したり、反転させたり、もう、バラバラな形で書くということにつながっていきました。

司会：その当時の作品は、まだ字として読めるものですね。

高濱：そうです。まだその時には、えー、字の位置は変えても、字そのものを書くということからは離れてなかったです。その後、えー、その作品を書き続けている中で、まだ自分が表現したいものに近づいていないということがはっきりしましたので、今度は文字を解体していって、自分が表現したいものにより近ヅイテ言ったということになります。

司会：その脱却の結果が文字ではないものを書くということだったんでしょうか。現在のこの、背景画面で紹介しているような作品は、むしろ絵画で、書からははみ出してしまっていますね。

高濱：そうですね。書の世界から見たら、完全にそれはもう逸脱したものですから、僕も自分では書だとは思っていませんし、技術的にも書以外の技術がたくさん入っていますから、そういう意味でも書ではないと思います。

司会：そして、現在の作品群を作成するようになったそうですが、現在は作品の発表を、特に世界を対象とした作品の発表として、どんなことをされていますか。

高濱：そうですね、まあ作家の活動といいますのは、通常は、まず作品を制作することであって、その次にそれを発表して行くことなんですけれども、僕の場合には、えー、自分で個展を企画して作品を発表することと、それから、まー、個展の企画を受けて、その企画をしたところのために作品を作るということ、二つ行っています。そして、最近では作家としての作るという仕事と、作った作品を今度は見せて売っていくという、ギャラリストという立場の方がいるんですけれども、その仕事が完全に二分化してまして、えー、いいギャラリストで自分の作品をわかってくれる人と会うというのが、作家にとってはとてもラッキーなことなので、そういう出会いがあればいいなあと思ってます。そして、僕も今、あるギャラリストの方と出会って、ベルギーの国際アートフェアなどに出展しています。

司会：そうでうか。今後のご活躍を期待しています。今日はありがとうございました。

高濱：ありがとうございました。

銀座

東京の銀座。銀座の近くには、明治時代に外国人が多く住んでいたため、西洋の文化が一番早く入ってきました。それから今日まで、銀座はおしゃれで、現代的な街として、発展してきました。また、銀座にはたくさんの画廊があり、毎日いろいろな展覧会が開かれています。

高濱武周さんも、この街の画廊で個展などを行ってきました。今日は高濱さんに銀座を紹介していただきます。

司会：ここは銀座４丁目の交差点です。にぎやかな銀座の中でも最も人通りの多いところですね。

高濱：そうですね。銀座は１丁目から８丁目まであるんですが、４丁目はその中心といっていいと思います。特にこの通りには、デパートや高級品を売る店が並んでいます。

司会：銀座というと高級品を売る店が多くて、とてもおしゃれな街という印象が強いんですが。

高濱：そうですね。日本全国いろいろなところに「なになに銀座」という繁華街があるように、日本の繁華街のシンボルのような街ですね。

司会：もともと銀座というのは、お金の銀貨を作る役所があったんですよね。

高濱：そうです。江戸時代に銀貨を作る役所がありました。江戸には別の場所に、金貨を作る金座もあったそうですよ。街の名前が銀座になったのは明治になってからだそうです。

司会：どうしてこの街にはおしゃれな店や高級品を売る店が多くなったのでしょうか。

高濱：明治時代、銀座のとなりの築地には外国人が数多く住んでいて、明治政府が、この街をヨーロッパの街のようにしようと計画したんですね。

司会：ああ、古い煉瓦作りの建物が残っていますが、その名残なんでしょうか

高濱：そうですね。明治時代には、こうした建物には新聞社や出版社などが入っていて、日本の情報発信の中心だったそうです。

司会：でも、その後、関東大震災や第二次世界大戦がありましたよね。

高濱：ええ、震災や大戦の時の空襲で、ほとんどの建物が被害を受けたそうですが、そうした打撃からも復興してきました。その度に道路の道幅が広げられたり、新しい建築様式を取り入れたりして、最先端の街を守ってきました。

司会：現在は、銀座のほかにもおしゃれな街はたくさんできましたが、今でも銀座の高級なイメージは変わっていません。

司会：銀座は、高級なブティックやデパートだけではなく、いろいろな顔がありますね。

高濱：そうですね。古くからやっている天ぷらやお寿司など日本料理の店も多いですし、

司会：あ、銀座は実は海の近くなんですよね。

高濱：ええ、江戸時代から銀座の隣の築地には魚介類の市場があって、新鮮な素材を手に入れやすいところです。

司会：食べ物といえば、日本料理だけではなく、フランス料理屋、イタリア料理の高級なレストランも多いですね。

高濱：そうですね。銀座に店を出していれば一流の店というイメージがありますね。でも、値段もかなり高いですから気をつけて下さい。

司会：はい。

高濱：あとは、歌舞伎座のある街としても、バーが多いのも有名ですね。

司会：高濱さんは銀座にはよくいらっしゃるんですか。

高濱：よく行くというわけではないんですが、自分の作品の個展などを行うときには、銀座の画廊にお願いすることが多いんです。

司会：画廊。そういえば、銀座の街を歩くと画廊を多く見かけますね。

高濱：そうですね。表通りの大きな画廊もあるし、裏道にも小さな画廊がたくさんあります。一つのビルの中に、たくさんの画廊が入っているところもあるんですよ。

司会：どうして銀座には画廊が多いんでしょうか。

高濱：やはり、日本の文化の中心というイメージと、にぎやかな街である点が画廊の多い理由だと思います。自分の個展を開くとき、銀座で開催するというのは一つのステータスになると思いますし、交通の便もいいので、実際にたくさんの人に見てもらうことができます。

司会：銀座の画廊は、個展を主に行うところが多いんですか。

高濱：個展だけではありません。個展というと、画廊のスペースを借りて画家自身が開催することになる場合が多いんですが、画廊が自分で企画をして、一人の画家や複数の画家の展覧会をすることもあります。

司会：画廊はもともと絵を売る場所ですよね。

高濱：そうですね。絵の販売を中心にしている画廊も勿論たくさんあります。

司会：銀座は、絵の好きな人にとってはたまらない街でしょうね。＜カメラ目線＞みなさんも銀座の画廊巡りをしてはいかがでしょう。

日本語・日本事情教育教材としての落語
「真田小僧」「芝浜」

西郡 仁朗

同素材は、２００５年１月２９日、東京都立大学小講堂において行われた柳家小太郎氏の落語会をもとに、上級を超えるレベルの日本語・日本事情教材として制作された。

注釈については、『日本語能力試験出題基準-改訂版-』を参照し、その１級を超える語彙や、内容を理解する上で解説が必要だと思われる要素について記している。

演者：落語家 柳家小太郎（現、柳亭左龍）

テキストデータ作成と注釈：上迫 和海（異文化教育研修所　有隣館）

撮影協力：小松 恭子（科研費協力者）
東京都立大学 落語研究会
東京都立大学 劇団「時計」

文献：国際交流基金・日本国際教育支援協会(2002)
『日本語能力試験出題基準-改訂版-』凡人社

真　田　小　僧

柳家小太郎

ありがとうございます。えー、私のほうは、先ほどご紹介をいただきました柳家小太郎（やなぎや・こたろう）という者でございます。えー、今日は落語を[*1]二席、聞いていただきまして、えー、最後は質疑応答（しつぎおうとう）を迎えるということになっておりますので。えー、どうぞ緊張なさらずに聞いていただきたいと思います。えー、こちらから見ておりますと、皆様、[*2]こうやって聞いていらっしゃいますけれど、えー、[*3]所詮（しょせん）、我々のほうは[*4]飲む打つ買うの[さん][*5]三道楽（どうらく）でございますので、えー、[*6]まともなことは申し上げません。えー、まともなことを申し上げないって言うわりには、学校でやっていたりなんかするんですけども。えー、真剣に聞かないように、お願い致します。えー、ほんとでございますよ。ねっ、メモなんか取る必要ありませんので、えー、頭の中で覚えて帰っていただいて、レポートを書いていただくと。そのようにしていただこうと思うわけでございます。

いいもんでございますね、[*7]落語研究会。私も、実はまあ、若かりし頃、今もまあ若いほうかもしれませんが、えー、落語研究会というところにおりました。えー、[*8]某（ぼう）大学でございますけども。えー、ま、ろくな学生じゃなかったですね。えーえー、あんまりほめられた学生じゃありませんでした。えー、だいたい落語研究会にー、いる…、あんまり余計（よけい）なことは言いませんけれど、えー、[*9]落研（おちけん）だって言われるだけで、なんか、[*10]さげすまれておりましたんでねえ。えー、まともな学生じゃありませんでしたけども。んー、まあ、私の場合は、なんで落語家になったかと言いますと、まじめに働くのが嫌（いや）だったんですね。そもそも、ここから間違っております。えー、毎日毎日、通勤電車に乗って、会社に行くというのは[*11]性（しょう）に合わないんですね。ですから、まあ、なんかこう、のんびりした職業はないかなあと思って、えー、都内にある[*12]寄席（よせ）という所に行きましたら、あー、この人たちは遊んで暮らしているなあと思いましてね。あ、ちょっと、じゃあ、大学一年の時に思いまして、「いいなあ。」っと。じゃ

＊１　二席：「席（せき）」は、落語（らくご）の数え方。

＊２　こうやって聞いていらっしゃいますけれど：背筋（せすじ）を伸ばした姿勢（しせい）を示し、まじめに聞いている様子を表現している。

＊３　所詮：結局。いろいろといい面を考えてみても、結局はそれほど立派なものではない、というニュアンスを持つ。

＊４　飲む打つ買う：それぞれ、「飲む」はお酒を飲む、「打つ」はばくちを打つ（ギャンブルをすること）、「買う」は女性を買うことを意味する。男性が好む悪いものの代表を並べて言い表したもの。

＊５　道楽：「遊び」とか、「趣味」とかのこと。ただし、あまりいい意味ではなく、社会的にほめられない遊び、お金を無駄（むだ）にたくさん使う趣味などのニュアンスがある。

＊６　まともな：まじめなこと。正直なこと。きちんとした考えをともなった発言、行動であること。

＊７　落語研究会：落語について、研究したり練習したりして、いっしょに楽しむための大学内のクラブ。

＊８　某：はっきり名前を言いたくない時に、名前の部分に代わりに使う語。

＊９　落研：＊７「落語研究会」を短く言ったことば。

＊10　さげすまれて：「さげすむ」は、上から下へ他人を見ること。その受身形なので、他人から下に見られる、という意味。

＊11　性に合わない：その人が持って生まれた性質に合わない。

＊12　寄席：落語など各種の芸能を見せて、客を楽しませる所。

あ、大学四年の春、就職活動が始まる頃に、もしこの情熱が冷（さ）めていなかったら、落語家になってみようかなあ、なんてね。で、まあ、三年の終わりぐらいに、どうだい、君はなる気あるのかいって聞きましたら、まだあったんですねえ。えー、それで、まあ、[*13]リクルートスーツも作ることなく、えー、[*14]師匠（ししょう）のところへ[*15]ピンポンと押しに行きまして、[*16]弟子（でし）にしてくださいと、えー、そういうことになったんです。えー、ですが、まさかねえ、卒業アルバムの就職先のところに「落語家」というのは書けませんから、私の卒業アルバムのところには「[*17]家事手伝い」となっておりますねえ。ええ、不思議なもんでございますよ。そのうえ、卒業してないんですね。えー、[*18]単位の取り間違いでございます。えー、いろんな事情がございまして、こういう世界に[*19]落ちぶれているわけでございます。さげすんだ目で見ないようにお願いしたいわけでございますけども。

まあまあ、今日は二席、落語を申し上げます。一席目は軽く、まあ、何か様子を見てやらせていただきまして、もう一席は「[*20]芝浜（しばはま）」ということになっておりますので。まあ、本来はね、年末（ねんまつ）、[*21]大みそかの話なんでございますが、えー、[*22]人情噺（にんじょうばなし）一つね、やっていただきたいという、やってくれということがありましたので、えー、ぜひにということで、私のほうも勉強させていただきます。

んんー、初めて落語を、今日、聞かれる方、多いかと思いますけども、えー、我々の持って来る物というのは、この扇子（せんす）と手拭（てぬぐい）でございます。これは、もうー、えー、皆様が、女性の方が使うのは、こう、京扇子（きょうせんす）でございますね。これは、江戸扇子（えどせんす）、江戸扇子でございますね。骨が太くて、こういう風になっております。我々のほうでは、高座扇（こうざせん）といいます。ええ、コウザというのは、高い所に座ると書きまして高座ですね。まさに、高い所に座っております。えー、それから、こちらが、手拭です。えー、今は、もうタオル全盛でございますから、手拭はあまり見なくなりましたけれど。えー、この二種類。これだけで、皆様の想像力（そうぞうりょく）に頼って、楽しんでいただくというのが落語でございますね。えー、いろんな物に変わるわけでございますよね。えー、これを、こう、ちょいと持ちまして、えー、こんな風に持ちますとね、筆になったりなんか致しまして、

＊13　リクルートスーツ：特に就職活動を目的としたスーツ。

＊14　師匠：日本の古典的な芸能や技術などを教える人。

＊15　ピンポン：家の中の人を呼ぶために玄関に付けてあるチャイムの音。

＊16　弟子：＊14「師匠」のもとで、その芸能や技術などを学ぶ人。

＊17 家事手伝い：料理、洗濯、掃除など、家の中の仕事をする人。同じような仕事でも、「主婦」が「主（しゅ）」なのに対し、「手伝い」という位置づけに立場的な特徴がある。

＊18　単位：大学などで勉強した科目に対して、所定の条件を満たしたのち与えられるもの。必要な単位を取ることが、卒業につながる。

＊19　落ちぶれて：「落ちぶれる」は、社会的地位や生活状態が大きく下がった結果、みじめな境遇（きょうぐう）になること。

＊20　芝浜：落語の噺（はなし）の題。たくさんの噺の中で、特に有名な作品。

＊21 大みそか：１２月３１日のこと。「みそか」は各月の月末を意味し、「大みそか」は更（さら）にその最後の意味。お金などの貸し借りがある場合、この日が返済（へんさい）の期限（きげん）となるのが通例（つうれい）であった。

＊22 人情噺：落語で、人情（にんじょう）を主題にした噺。「人情」は人間がもともとに持っているとされる感情の動きのことで、おかしみに加えて涙を誘うような話の展開が多い。

「はいはいはい、何です？あなたのお名前、はい、中村さんですね。えー、ナ・カ・ム・ラっと。ええ、これでよろしいですか。」
なんてえとね、筆になんか見えたりしますけれど。

　えー、それから、ま、有名なところでは「時[*23]そば」というお噺[*24]（はなし）がございますねえ。んんー、もり[*25]そばじゃあございません。いわゆる、かけ[*26]そばでございますけども。
えー、それを食べるのも、扇子一本でできるわけでございまして、
「おう、なんでえ、もうできたんかい。ええ、ありがてえじゃねえか。えー、なんでえ、おめえのとこ、割箸（わりばし）、使ってんなあ。ええ、そうかい。ええ、ひとつ、やってみようじゃあねえかな。ふー、ふー、ずるっ、ずるっ。ああ、いいだし[*27]、使ってるね、おい。いや、また、そばが細いね。いやあ、そばは、細くなくっちゃいけねえよ。よく、うどんと間違えるようなそばがあるけどもさあ、そばはこうでなくっちゃあいけねえよ。って言うじゃねえかな。ずるずるっ、うん、うん、きいてる。口の中へ入れるとね、ぼきぼき、ぼきぼき音がするよ。うん、はっはっはっ、うん、うん、はあっ。」
なんてえとね、そばを食べているような気が致しますけど。えー、また、刀なんかもそうですね。刀が出てくるお侍[*28]（さむらい）の話なんかもございます。ま、こんな所で実際に刀なんか持って来て振り回すわけにはいきませんので、目線[*29]でもって、刀の長さを表します。刀を、こう、抜きます。
「うん、名刀[*30]（めいとう）である。」
なんてえとね、なんとなく、こう長さが出ます。これが長いといけませんようでね。
「ううん、…、…、…」（笑）
ね、どこまであるかわかりませんね。逆もいけないようで、
「うん、うん。」
なんてえとね。おもしろいもんでございますけども。
　また、手紙なんてえのも、そうですね。手紙がまいりまして、
「はい、はい、何です。お手紙、私に。はい、はい、はい、こちらにお預かり致します。ちょっと見ますんでね。ええっとね、ええっと、ふうっ。何、何、ふんふんふん。ふんふん、ふんふん、ふん、ふん。ふうん、ふうん、ふわあっ…」
なんか読んでるような気が致しますけども。一部、受[*31]けてるようでございますけどもね。

＊23　時そば：落語の噺の題。

＊24　お噺：ストーリーや「落ち」（人を笑わせるための最後の部分）をともなった話。

＊25　もりそば：麺（めん）と汁が別々な器（うつわ）にあるそば。

＊26　かけそば：どんぶりの中に麺と汁がいっしょに入れてあるそば。

＊27　だし：鰹節（かつおぶし）（カツオという魚を煮（に）て、乾（かわ）かして固くしたもの。削（けず）って調味料（ちょうみりょう）として使う）や昆布（こんぶ）などを煮た汁（しる）（スープ）。そばやうどんにかける汁を作るための一番の元（もと）になる。

＊28　お侍：江戸時代にあった社会的階級の一つ。刀を持ち歩くことが許されていた。

＊29　目線：目が見ている方向。「視線（しせん）」と同じ意味だが、演劇などでよく使われる語。

＊30　名刀：有名で、美しく、よく切れる刀。

＊31　受けてる：「受けている」好感を持って、人に受け止められている状態。ここでは、笑わせようとした試みが成功して相手が笑っていること。

えー、もう、皆さん、のんびり、あの、今日はこれだけの人数でございますので、家族的な雰囲気でまいりましょう。ねっ、緊張すること、ありませんので。最後まで、この調子でいきますので。えー、のんびりと、ほんとう、してください。

　え、こういう風に想像力で、ええ、ま、何て言うんでしょう、皆さんが笑っていただけるのが、落語でございます。え、ちょっとまじめなお話を申し上げますと、よく、この学校寄席なんてのも行くんでございますね。えー、小学校は高学年から中学校、高校、行きますけども、んー、やっぱり、このー、最近、どんどんどんどん、なんかこう、小さい方が想像力が乏（とぼ）しくなっているせいか、反応がどんどん薄くなってきておりますね。

えー、まあ、まじめな話しちゃ、なんですけども、「[*32]ゆとり教育」の[*33]ゆがみみたいなものが、ちょっと出ているような気が致しますねえ。漫画（まんが）を、皆さん、よく読まれますから、ええ、本を読む方、少なくなりましたねえ。漫画というのは、こう、開きますと絵が描いてありますので、えー、そのー、頭で想像しなくても映像（えいぞう）が目から飛び込んでまいります。本は、そうじゃあございませんでね、本を読んでいますと、いろんな情景（じょうけい）が、こう、頭に浮かんでまいります。落語も本といっしょでございましてね、えー、想像力のある方はおもしろい。想像力のない方は、何やっているかまるでわからない。ですから、のんびり聞いていただいても、結構（けっこう）なんでございます。ですが、想像力だけは少し、こう、開いておいていただければ幸いかなあ、と思います。

　えー、[*34]小噺（こばなし）なんてのも、いっぱいあるわけでございますよ。ねえ、えー、せっかくでございますから、今日はね、小噺の一つや二つ、覚えて帰っていただきましてね、えー、うちへ帰ってやっていただこうという。えー、何かおみやげがなくっちゃあね、皆さん、いけないなあと、勝手に私のほうで思ったりなんかしております。ええ、そうですね。さっきの「[*35]酒の粕」という小噺、あれもね、有名な[*36]前座噺（ぜんざばなし）でございますけども。

　えー、そうですね、それでは、まあ「[*37]鶴（つる）の[*38]恩返（おんがえ）し」という話をしてみましょうね。えー、[*39]罠（わな）にかかった鶴を助けてあげたおじいさん、夜になって、その鶴が娘の姿になってご恩返しにまいりまして、
「昼間、助けていただいた鶴でございます。ぜひ、ご恩返しをさせてください。隣の部屋でかたかた音がしますが、音がしなくなるまで絶対にこの戸を開けないでください。」

＊32　ゆとり教育：子供が勉強以外の事もたくさんできるように、学校での授業時間を減らした教育。

＊33　ゆがみ：正しい状態と違うために生じた不都合な状態。

＊34　小噺：＊24「お噺」の中で、非常に短いもの。

＊35　酒の粕：＊34「小噺」の題。

＊36 前座噺：前座（ぜんざ）がする種の噺。「前座」は、東京の落語家の地位・格（かく）で一番下。＊12「寄席」では、初めのほうで前座が演じる。

＊37　鶴：鳥の種類。大型で、白い美しい姿を持つ。

＊38　恩返し：相手から受けた「恩」（助けてもらうこと）を、相手のために行動することで返すこと。「鶴の恩返し」という題名の極めて有名な昔話（むかしばなし）があり、この小噺はそのストーリーが下敷（したじ）きになっている。

＊39　罠：動物をつかまえるために、わからないように仕掛（しか）ける道具。

朝になって音がしなくなったので、おじいさんが、戸をすうっと開けてみますってえと、家[*40]財道具（かざいどうぐ）から一式（いっしき）、すべて無くなっていた、という。（笑）あれは、鶴じゃなくてサギ[*41]だった、という話があるんですね。ええ、やや受けでございますか。これ簡単でございますので、すぐ覚えられますね。鶴が恩返しをしまして、家財道具一式すべて無くなっていた。ちょっと間をおいて、「鶴じゃなくてサギだった。」と言う。まあ、これでねえ、一人千円ずつぐらい取れるんじゃないですか。場所によりましては、晩飯のおかず代ぐらいにはなると思いますけれども。

じゃあ、も一つぐらいね、覚えて帰っていただきたいと思いますねえ。或る奥様が、お供[*42]（とも）を連れて美術館にやってまいりました。
「私ねえ、近頃、絵の勉強しているから、すぐにわかるのよ。ああ、これ、わかる、これ。これ、ルノワールよね。」
「奥様、それはゴッホでございます。」
「あら、ゴッホなの、やんなっちゃう。はっ、はっ、はっ。これ、わかる、これ。これも、ゴッホよね。」
「奥様、それが、ルノワールでございます。」
「あら、そうなの？やんなっちゃうわ、冗談…、これだったら、わかる。これだったら私にだってわかるわよお。これ、ピカソよね。」
「奥様、それ、鏡でございます。」（笑）
ええ、もう、すぐおわかりになっていただいて、文化水準が高いなあと確認致しました。

ええ、まあ、この二つ、覚えて帰ってやっていただくと、えー、まあ、ご祝儀[*43]（しゅうぎ）が取れるか、うちでばかにされるか、どっちかでございます。えー、まあ、この二つぐらいは覚えて帰っていただこうというわけでございます。
　まあ、こういう風に、落語というのは短い小噺から長い噺（はなし）までございます。ええ、まあまあ、のんびりとお付き合いいただきたいわけでございますが。えー、一席やりまして、もう一席、続けてやらせていただきますので、えー、まあまあ、おトイレ、行かれる方は、早めに行っといたほうがいいかもしれませんね。ええ、まあまあ、かと言って、やってる途中にぱっと立たれると、私のほうがどきんとしたりしますので。まあ、１時間もかかりませんので、あと４０分ぐらいで終わりますので。えー、そのつもりで我慢（がまん）していただければと思うわけでございます。

＊40　家財道具：家の中にある道具。ふとん、たんす、火鉢（暖房のための道具）など。

＊41　サギ：鳥の名前。形が＊37「鶴」に似ているが、やや小さい。鶴は珍しく、美しい鳥とされているが、「鷺」は身近によく見かけるために、人々が価値の高い動物だと思っていない。また、「詐欺」（人をだまして、お金や物を取る行為）と音が同じであるため、両方の語を重ね合わせて使うことで、ことば遊びになっている。

＊42　お供：ついて行く人。「奥様」に対して、下に位置づけられている。

＊43　ご祝儀：芸人がした芸に対してあげるお金や品物。

　えー、まあ、そうですねえ、まあ、よく「[*44]小児（しょうに）は白き糸の如し」なんてなことを申しまして、お子さんというのは生まれたときは真っ白なんだそうでございます。それを[*45]親御（おやご）さんの染めようでいろんな色に変わっていくんだそうですが。ですから、ま、教育ですとか、環境などというのものは、選ばなくちゃいけないなんてことを言うんでございましょうね。んー、環境によって遊びのほうもどんどん、どんどん変わってまいります。駅の近くで[*46]電車ごっこですとか、学校の近くで学校ごっこ、こういうのは、まあ、かわいらしいんでございますが、中にはお寺の近くで[*47]お弔（とむら）いごっこなんてのをやっておりまして。これは、まあ、いい遊びじゃございませんで、

「よっちゃん、よっちゃん。今日、おめえが、[*48]仏様になんだぜえ。」

「いやだなあ。だって、あたい、きのうも死んだんだよ。たまには、[*49]お焼香（しょうこう）させてよ。」

お焼香するのを[*50]名誉（めいよ）がったり致しまして。変な話になりまして。

　中には、刑務所（けいむしょ）の近くで懲役（ちょうえき）ごっこなんてのをやってまして。これも、あんまりいい遊びじゃありませんで、

「まあ、なんだね、この子は。人が洗って着せてりゃ、すぐ汚しちまって。何やってんの、泥なんかを担（かつ）いで。」

「[*51]おっかさん、あたいはね、今ね、懲役ごっこやってんだい。」

「つまんない遊びしてんだねえ。やめなさい。」

「えへへへ、そうはいかないんだい。やめっと、みんな、いじめんだもん。」

「何、言ってんの。お前が、[*52]がき大将じゃない…。ほらっ、[*53]六ちゃんをご覧（らん）なさい、六ちゃんを。ねえ、筵（むしろ）の上におとなしく黙って座って、お前もね、少しは六ちゃん、見習って遊んだらどうなの。」

「おっかあ、何も知らねえんだから、黙ってろよ。六ちゃん、おとなしいたって、しょうがねえんだい、これ。終身（しゅうしん）懲役なんだから。生涯、[*54]娑婆（しゃば）の風に

＊44　小児は白き糸の如し：「小児」は、小さな子供のこと。「白き糸」は、色が付いていないという意味を強調している。

＊45　親御さん：「親」の丁寧な言い方。

＊46　電車ごっこ：子供の遊び方。「～ごっこ」は、何者かになったつもりで演じる遊び。「電車ごっこ」は、子供同士で電車の運転手になったり乗客になったりして遊ぶ。「学校ごっこ」であれば、教師や生徒、保護者などの役があり得る。

＊47　お弔い：「葬式（そうしき）」の古い言い方。

＊48　仏様：仏教における信仰の対象。ただし、ここでは、「死者」を意味している。

＊49　お焼香：死者に向けて、香（こう）（香りの素）を焚（た）いて匂いを立たせること。

＊50　名誉がる：本来は名誉（めいよ）なことじゃない物事に、名誉を認めている。

＊51　おっかさん：「おかあさん」のくだけた言い方。

＊52 がき大将：子供の中でリーダーシップをとっている子。非常に元気のある子、やや乱暴（らんぼう）な子、大人をおそれない子などのイメージがある。

＊53　六ちゃん：子供の名前。

＊54　娑婆：刑務所の外の自由な世界を意味する卑語（ひご）（下品な言葉）。

当たることはできねえんだい。そこへいくってえと、あたいなんか、[*55]こそ泥（どろ）で捕まった三月（みつき）の[*56]はんぱ懲役だからね、こうやって[*57]もっこを担（かつ）いで、泥や何か運ばなきゃいけねんだい。だから、着物が少しぐらい汚れたって、しょうがねえんだい、これ。」
「ま、やだね、ほんとに。じゃあねえ、おっかさんがみんなに頼んであげるから、おまえも終身懲役に回してもらいな。」
ひどい親があったもんでございますが。

　でも、こういう[*58]箸（はし）にも棒にもかからない子供が、我々のほうでは[*59]立役者（たてやくしゃ）ということになっておりまして、

「ねえ、[*60]おとっつあん、さあー、少しでいいから、おくれよ。」

「だめだよ。おめえなんか、子供のくせに、[*61]銭（ぜに）など使うこたあ、ねえじゃねえか。」

「そんなことないよ。あたいだって、男だ。[*62]敷居（しきい）またぐと、七人の敵（かたき）があらあ。」
「へっ、生意気（なまいき）なことを言いやがって。えっ、いいか、子供のうちから銭、使うってえとな、[*63]末（すえ）、行って、[*64]ろくな者にならねえぞ。」
「ろくな者にならねえたって、あたいねえ、おとっつあんぐらいになりゃいいと思ってんだ。」
「なんだ、そのおとっつあんぐらいってな。えー、おう、おっつあんぐらいになれれば、立派なもんだ。」

「そうそう。おとっつあんより悪けりゃ、もう[*65]乞食（こじき）だ。」

「この[*66]野郎（やろう）。いいから、[*67]表（おもて）へ行って遊んできな。」
「そんなこと言わねえでさあ、少しでいいから、おくれよ。」
「だめだよお。第一、お前、今日のお小遣（こづか）い、さっきやっただろう。」
「あれ、使っちゃった。」
「使っちゃったんなら、しょうがねえじゃねえかな。あきらめな。」

＊55　こそ泥：「泥」はどろぼうのこと。その中で、「こそ泥」は安い物を盗むこと。
＊56　はんぱ：数や量の区切りが悪いこと。
＊57　もっこ：土などを運ぶための道具。

＊58　箸にも棒にもかからない：手のつけようがない。とても悪くて、よくなりそうな方法がまったく無い。
＊59　立役者：その物事の成功のために、特に重要な役割を果たした人。

＊60　おとっつあん：「おとうさん」のくだけた言い方。
＊61　銭：お金。
＊62　敷居またぐと、七人の敵：「男は敷居をまたげば七人の敵（てき）あり」ということわざを部分的に使った。男が家の敷居をまたいで外へ出ると、本人の言動にかかわらず七人の敵が待っている、というのが直接の意味。つまり、男が世の中で活動する時にはたくさんの競争相手がいると考えていつも備えを持って緊張して行動せよ、ということを言っている。

＊63　末、行って：ここでは、「大人になってから」というような意味になっている。
＊64　ろくな者にならねえ：「ろくな者にならない」しっかりした、まともな人間にならない。

＊65　乞食：仕事や住居、財産などが無く、人の善意に頼って、お金をもらって生活している人。
＊66　野郎：「人」の卑語。
＊67　表：家の外。

「あきらめなってえ、うー。あっ、じゃあ、おとっつあん、さあ、あしたの分をおくれよ。」
「あした？おめえ、あしたは、どうする。」

「あしたはね、あさってのをもらう。あさっては、[*68]やのあさってのをもらってね。順繰り（じゅんぐり）順繰りもらっていくうちに、十日もすれば、おとっつあん、ばかだからわかんなくなっちゃう。」
「この野郎。いいから、表へ行って遊んできな。」
「そんなこと、言わねえでさあ。少しでいいから、おくれ。」
「だめだよ。」
「少しでいいって、言ってんじゃないかよ。どうしてくんないの。くんなきゃ、いいよ。こっちにも考えがあらあ。」
「おおっ。考えがある？はっはっ、おめえのことだから、なんだろ、また、いたずらに植木鉢（うえきばち）の植木か何か引っこ抜こうってんだろ。」

「今日は、そんな[*69]手ぬるいこっちゃねえよ。[*70]ぬかみその中、おしっこ、しちゃおう。」

「なにをー。ぬかみその中、おしっこするだあ。ああー、やれるもんならやってみろ、おとっつあん、[*71]ただおかねえからな。えいっ。」

「やだ、脅（おど）かすなよお。ねえ、おとっつあん、さあ、少しでいいから、おくれよ。」
「だめだよ。」
「どうしても、くんないの。くんなきゃ、いいよ。おっかさんからもらうから、いいや。」
「ふん、それが、おめえは、ばかだって言うんだ、なあ。おっかさんが持ってる銭ってえのは、俺からやるんじゃねえか。[*72]きん坊（ぼう）には一銭もやっちゃいけねえよって一言（ひとこと）言やあ、おめえには銭、やりゃあしねえや。」

「そうか。じゃあ、あたいがおっかさんに『[*73]おあしくれ。』ってえと、『おとっつあんから止められてるからいけないよ。』と言われれば、あたいがあきらめると思ってんの。」
「うん。」
「えっ、へ、へ。そんなこと、思ってんの。親なんてのは、いつまでたっても甘えもんだ。あーあ、張り合いがねえ。」
「なんだ、その張り合いがねえってのは。」
「だからね、あたいがおっかさんに『おあしをくれっ。』てえと、『おとっつあんから止められてるからいけないよ。』『どうしてもくんないの、くんなきゃいいよ、この間、おとっつあんが仕事でいないときに、こんにちはって来た男の人のことを、あたいが方々へ行っ

＊68　やのあさって：「あさって」の次の日。つまり、今日から三日後。

＊69　手ぬるい：きびしくない。たいした事ではない。

＊70　ぬかみそ：ぬか（米の皮が粉状になった物）に塩水などを加えてねったもの。野菜などをその中に長時間入れて漬物を作る。

＊71　ただおかねえ：「ただじゃおかない」無事にはすまさない。何らかの罰を与える。

＊72　きん坊：この落語の主人公の呼び名。名前の一部に「坊（ぼう）」を付けて呼ぶのが、子供に対して一般的におこなわれた。例えば「金之助（きんのすけ）」であれば「きん坊」、「新兵衛（しんべえ）」であれば「しん坊」などとなる。

＊73　おあし：ここでは、「お金」の意味で使われている。ただし、それほど大きなお金ではないイメージがある。

てべらべらべらべらしゃべっちゃうからね。』おっかさん、急に真っ青になって、『あら、ちょいとお待ち、そういうことは、あまりほかでしゃべっちゃいけませんよ。おあしは、いくらでもあげるから。』ってんでお小遣いを…。はあ。ははは、あたいは弱みを握（にぎ）っている。」
「おい、おめえ、何かあったのか。」

「[*74]尾張（おわり）名古屋（なごや）のこんこんちき。この間さ、おとっつあん、お仕事でいない時があったでしょ。」
「おう。」
「あん時にね、『こんにちは。』って来た男の人がね、あたいが出ていこうとした時。あたいが表、行こうとしたらね、おっかさんが『おまえかい？』。うーん、…。あたい、表に行って遊んで来よう。」
「いや、表は危ないよ。表はあぶねえんだよ。こういう世の中なんだから。いいから、いいから、その話、ちょいとおとっつあんに聞かせてくんねえかな。」
「へへっ。聞きたい？」
「いや、まあ、聞きてえってわけじゃないけども、どうしたい？話してごらん。」
「じゃあ、おとっつあんさあ、寄席、行ったことある？」
「なんだ、『寄席、行ったことある？』ってのは。」
「あるかって聞いてんだよ。」
「そりゃあ、おりゃあ、落語なんか、好きだい。寄席なんて、しょっちゅう行ってるよ。そんなの、おめえだって、知ってんじゃねえか。」

「だからさあ、寄席ってえ所はさ、[*75]お噺を聞いてからおあしを払うの、それとも聞く前に払うの。どっち？」
「嫌な野郎だね、こいつは。わかった、わかった。じゃあ、話してごらん、おあしをあげるから。」
「何を言ってんだい。あたいのほうでお話をしたいから、おあしをおくれってんじゃないんだよ。おとっつあんのほうで、どうしても聞きたいから、じゃあ、先におあしをくださいな。おとっつあんね、こういうのが世の中の道理（どうり）として…。」

「わかったよ。何だってえと、[*76]小むずかしい事ばっかり言いやがって、ほんとに。ええっ。じゃ、ほら、やるから、持って行きな。」

「くれれば、お話しをする。[*77]端（はな）から…。なんでえ、おとっつあん、えばってたっ

＊74　尾張名古屋のこんこんちき：「尾張（おわり）」は、名古屋近辺の地域の古い名前。「名古屋（なごや）」は、中部地方にある都市の名前。「こんこんちき」には特別な意味は無く、その前の語の意味を強調したり、音の調子を楽しんだりする働きである。

　会話の意味としては、「何かあったのか」という質問に対して、「大あり」（「有る」を強調している）と答えている。そして、その「おおあり」と「おわり」の発音が似ていることから「尾張」を持ち出し、さらに、昔の「尾張」に引っ掛けて今の「名古屋」を言い、言葉の調子の勢いで無意味に「こんこんちき」をくっつけた。

＊75　お噺を聞いてからおあしを払うの、それとも聞く前に払うの：自分が話をする前にお金を払ってほしい、と暗に言っている。

　ちなみに、江戸での落語はお金を払ってから噺を聞くが、上方（現在の関西地方）では噺が終わったあとでお金を払っていた。

＊76　小むずかしい：意味は、「むずかしい」と同じ。「小」は、意味や調子を強めるために付けられている。

＊77　端から：「最初から」。「最初からお金を払えばよかったのに。」というようなことを言いかけた。

てだめだよ。これ、[*78]一銭（いっせん）じゃねえか。」

「こんなやつはな、一銭でたくさんだよ。」
「たくさんって言って、たった一銭。うーん、…、まあ、いいや。あたいもおとっつあんの[*79]稼（かぜ）ぎ、知らねえわけじゃねえからな。一銭で、我慢しよ。その代わり、一銭分だけ話そう。」
「何だ、それ。一銭分だけってのは。どうした、話してごらん。」
「この間さ、おとっつあんがお仕事でいない時、あったでしょ。」
「おお。」
「あん時にね、『こんにちは。』って来た、男の人が。おっかさん、その男の人の顔、見たら急ににっこりしてね、『ああ、いいところに来てくれました。今、うちのかぼちゃ野郎がちょうどいないのよお。』なんてね。おとっつあんのことをかぼちゃだってね、そんなこと言ってやんだあ。」
「あの野郎、そんなこと、言ってやがったか。」
「うん。でもね、あたい、おとっつあんはかぼちゃじゃねえと思うな。」

「うーん、[*80]あたりめえだ。」

「えっへへ。どっちかって言うと、じゃがいもだ。」
「同じようなもんじゃねえかよ。そいで、どうしたい。」

「そっからね、おっかさんがその男の人の手を取ってね、『え、まあ、いいから、[*81]おあがり、おあがりー。』ってね、上へ引っぱり上げたの。」
「うーん、…、それで、どうしたい。」
「この先、聞きたい？」
「なんでえ、聞きたいってのは。話してごらんよ。」
「おとっつあん、この、上がってからは、二銭もらいてえんだ。えー、ね、二銭、出してさ、話の続き聞いちゃいなさいよ。二銭、出してさあ、あがっちゃいなさいよ。[*82]ね、ちょいと、旦那（だんな）。おあがりー。」

「おめえ、どこでそういうくだらねえことを覚えて来やがる。まったく、人の[*83]足元（あしもと）、つけこみやがって。えー、じゃあ、これ、ほら、やるから持って行きな。」
「はっはっはっ。くれれば、お話しをする。そしたら、おっかさんがね、『おまえはいい子なんだけども、うちいると、うるさくてしょうがないから、表へ行って遊んでくんだよ。』

＊78　一銭：江戸時代のお金で、もっとも下の単位。

＊79　稼ぎ：働いて得るお金のこと。

＊80　あたりめえ：あたりまえ。「当然（とうぜん）」に「当前（ぜん）」という字を当て（意味がまったく違うにもかかわらず、同じ読み方をする漢字を使うこと）、それをさらに「当（あ）たり前（まえ）」と訓読みした語。「まえ」が「めえ」となるのは、江戸（現在の東京）での話し方の特徴の一つ。

＊81　おあがり：「あがる」の命令の意味。「あがる」は、家の中に入ること。日本の家屋が靴を脱いで、高くなっている床へ上がることを思い出すとよい。

＊82 ね、ちょいと、旦那、おあがりー：「旦那」は、年上の男性を呼ぶ呼び方。ここでは、商売をする人が客を呼ぶ使い方になっている。「おあがりー」は、＊81 を参照。
　この言葉全体は、お金を払って女性と遊ぶ場所へ男性を誘っている女性のまねをしている。

＊83 人の足元、つけこみやがって：「足元につけこむ」相手の弱い立場や状況を特に利　用しながら、自分に有利なように物事を運ぼうとすること。

ってね。五銭もくれたんだ、五銭も。あたいしょうがないからね、それをもらって『どうも、ありがとう』って、表へ遊びに行っちゃった。」
「この野郎、どうして、そんな肝心（かんじん）な時に、うちにいねえんだよ。今日みてえな時にぶらぶらごろごろしてやがって。ばか野郎。」

「怒んなよお。あたいだってね、おとっつあんの子だ。そこに、[*84]ぬかりがあるものか。」

「なんだよ、ぬかりがある物は。」
「あたいね、町内、ぐるっとひと回りしてね、また、うちへ戻って来た。そしたらね、出て行くときには確かに開けといた障子（しょうじ）がね、ぴったりと閉まってんだよ。うふっ、おとっつあん。」
「変な声、出すんじゃねえよ。そいで、どうしたい。」
「あたいね、障子んとこ行って、指つっこんで、ぐるぐるかき回してね、中、覗（のぞ）いた…」
「中、覗いたら、…。」
「中、覗いたらね。うふっ、おとっつあーん。かあーーー。あー、二銭は、ここまでです。」
「なんだ、『二銭は、ここまでです。』ってのは。話、続けろ。」
「おとっつあん、この覗きは、三銭、もらいてえ。」
「わかった、わかった。おとっつあんの負けだ。やるから、持って行きな。」
「くれれば、お話を。」
「おまえ、いちいち、しまうな。」
「いいんだ。あたいがもらったおあしなんだから。中、覗いたらね、蒲団（ふとん）が敷（し）いてあるんだ、蒲団がね。その上におっかさんが[*85]長襦袢（ながじゅばん）一枚になって横になってね、その男の人がおっかさんの体を触ると、『はあ、気持ちがいい。なんてえ、気持ちがいい。』」
「わかった、わかった、わかった。そいで、おめえさあ、おめえ、その男の顔を見たのか。」
「そいでね、あんまりおかしいから、その男の人の顔をじいっと見た。そしたらねえ。」
「うん。」

「なんだ、[*86]横丁（よこちょう）の[*87]按摩（あんま）さんがおっかあの肩もんでやんのよ。どうも、ありがとう。」
「なんだ、あの野郎、『どうもありがとう』って、駆け出しやがって。…、ああっ、きん坊、きん坊、きん坊。」

＊84　ぬかり：できるはずのしたほうがよいことをしないこと。

＊85 長襦袢：「襦袢（じゅばん）」は、肌に直接着る着物。現在の「下着」に相当する。「長襦袢」は、その長い物で、肩から足首までを一枚の布で覆（おお）う物。

＊86　横丁：表通りから横へ入った町並み。小さな通り沿いにある混み合った街が想像される。

＊87　按摩：マッサージを仕事にしている人。

「なんだね、大きな声で。[*88]長屋中（ながやじゅう）に聞こえちまうじゃないか。大きな声をお出しでない。」
「『お出しでないよ。』じゃないよ。おめえ、どこ行ってたんだよ。おめえがいないおかげでもってな、きん坊がおめえのこと、[*89]ねえことねえこと並べて、人から六銭、[*90]巻き上げてったよ。」
「あら、お前さんも、引っかかっちゃったのお。あたしも、この間、引っかかっちゃったのよお。それで、あの子、どんなこと言ってたい。」
「どんなことって、おめえ。…、おめえ、聞きてえか。」
「聞かしておくれよ。」
「そうか、ふふん。じゃあ、おめえも一銭、出しなよ。」

＊88　長屋：長い造(つく)りの一つの家屋に薄い壁(かべ)で隔(へだ)てられたたくさんの部屋があり、それぞれの家族がそれぞれの部屋に寄り合って住んでいる建物。

＊89　ねえことねえこと：「無い事、無い事」事実とは全然違う事。「有る事、無い事」という言い方のほうが一般的。

＊90　巻き上げて：「巻き上げる」だまして、不当にお金を取る。

芝　浜

柳家小太郎

もう[*1]一席、やらせていただこうというわけでございます。

んんー、まあまあ、私どものほうは先程も申し上げましたとおり、[*2]飲む打つ買うでございましてですね、私もお酒は好きなほうでございまして、本当に日々飲んだくれております。えー、まあ体によくないとわかってはいても、こう、ちょいちょいと行きたくなるというのが、まあ酒飲みの[*3]常（つね）じゃないかなと思いますけども。やはり飲みすぎないほうがいいんじゃないかなあと思いますねえ。んんー、いろんな所でお酒を飲みますけども、んー、だいたい、[*4]まっつぐうちへ帰ってまいります。うー、中には帰らない人もいます、[*5]噺家（はなしか）の中には。ああー、よくないですねえ。ええー、

「ゆうべ、どこで飲んでたの。」

「んんー、あのねえ、えー昨日（きのう）はねえ、んんーと、あれはねえ、起きたら[*6]越谷（こしがや）だった。」

「ああ、そうですか。大変ですねえ。」

なんてねえ。翌日、起きて、

「昨日はどこで飲んでたの。」

「えー、昨日はねえ、目が覚めたら[*7]川崎だった。」

ってねえ、みんなタクシーの料金が７０００円で収（おさ）まるという不思議（ふしぎ）なもんでございますね、その人は。うん、どこで飲んでても、[*8]どっか違う所へ電車へ乗って、家へ帰って来ると必ず７５００円なんですねえ。タクシーのメーターよりも正確な酔っ払い（よっぱらい）というのがいるようでございますねえ。ええ、まあまあ、お酒というのは、ほどよく、召し上がる（めしあがる）のがよろしいんじゃあないかと思いますねえ。

えー、[*9]ただいまと今とでは、いろいろなものが変わってまいります。うん、中でこう今、

＊１　一席：落語の数え方。

＊２　飲む打つ買う：それぞれ、「飲む」はお酒を飲む、「打つ」はばくちを打つ（ギャンブルをすること）、「買う」は女性を買うことを意味する。男性が好む悪いものの代表を並べて言い表したもの。

＊３　常：いつものこと。一般的な状態。

＊４　まっつぐ：「まっすぐ」。江戸（現在の東京）の一部で話されている方言を真似した話し方。「す」を「つ」のように発音する特徴を持つ。

＊５　噺家：「落語家」のややくだけた言い方。

＊６　越谷：東京にある町の名前。

＊７　川崎：東京近郊にある町の名前。

＊８　どっか：「どこか」のくだけた言い方。

＊９　ただいま：ここでは「今より少しだけ前」という意味で使われている。

この盛ん（さかん）にこのテレビでやっておりますけれど、*10築地（つきじ）という所がございますね。ええー、まあ、築地場外市場（しじょう）、場内市場と二つあるわけでございます。ええ、もう築地も移転するとかしないとか言っておりますけれど、まあ、日本最大の市場と言ってよろしんじゃないかと思います。えー、*11地方でいろいろとおいしい物を私もいただくんでありますが、あー、やっぱりこの築地にすべて集まってまいりますので、東京で食べる物が一番うまいんじゃあないかなあなんて、近頃思ったりなんかするわけでございます。

　えー、昔はこの築地にございましてですねえ、*12日本橋にも*13魚河岸（うおがし）がございまして、また、この*14芝（しば）のほうにも*15河岸というものがございました。あー、日本橋のほうは、朝はやーくに、こう、河岸が開きまして、芝のほうはってえと、朝と、また夕方に河岸（かし）が開いてたんだそうで。えー、ですから芝の人たちというのは朝夕二度、新鮮な魚を食べることができたという。魚好きの*16江戸っ子（えどっこ）にとりましては、これが大変な自慢（じまん）だったんだそうで。

「ちょいと、*17お前さん。起きておくれよ。ちょいと。お前さん。」

「ん、ん。いや。ああー、ん、ん。あー、なんでえ。」

「なんでえじゃないやね。さあ、*18商い（あきない）に行っておくれよ。」

「商い？あーー、いいよ、商いは。」

「いいよ、じゃないやね。お前さん、ゆうべ何て言った？こうやって毎日毎日酒ばっかり飲んでりゃ、そのうち*19お天道様（おてんとうさま）の*20ばちが当たる。おりゃ、明日っから心を入れ替えて一生懸命（いっしょうけんめい）働くんだ。だから、だから、今晩だけは好きなだけ飲ましてくれって、またゆうべあんなに飲んだんじゃないか、さあ、河岸、行っておくれよ。」

「うーん、そんなこと言ったのかなあ、俺（おれ）なあ。うーん、でもよお、二十日（はつか）近くも商い休んじまったんだい、*21盤台（はんだい）なんど乾（かわ）いちまって使いもんにならねえだろ。」

＊10　築地：東京にある町の名前。日本最大の魚の卸売市場（消費者に売るための魚を専門の業者が仕入れる市場）がある所として有名。

＊11　地方：ここでは、東京以外の場所どこでもを意味している。

＊12　日本橋：東京にある町の名前。

＊13　魚河岸：＊10 にある「魚の卸売市場」の昔の言い方。

＊14　芝：東京にある町の名前。現在の「浜松町」近辺をさす。ここの海近くの地域が、この落語の主な舞台である。

＊15　河岸：＊13 の「魚河岸」を短くした言い方。

＊16　江戸っ子：江戸（現在の東京）で生まれ育った人。ある種のプライドを含んで使われることが多い。

＊17　お前さん：「あなた」と同じ意味の語。夫婦など、親しい関係の間で使われる。この落語では、妻が夫を呼ぶ言い方として使われている。

＊18　商い：「商売」の和語（中国からの漢語がはいってくる以前にあった、もともとの日本語の言い方）。

＊19　お天道様：直接の意味は「太陽」のこと。ここでは、「神様」に近い意味になっている。

＊20　ばち：「罰（ばつ）」の意味の和語。ただし、人が決めるのではなく、神様が与えるものという考え方が背景にある。その罰を受けることを、動詞「当たる」を使って「ばちが当たる」と固定された言い方で表す。

＊21　盤台：昔の魚屋が魚を入れるために使っていた浅くて底が広いたらい（木で作られた大きめの容器）。「ばんだい」とも読むが、この落語では「はんだい」と発音されている。現代では、単語としても物としても、ほとんど使われることがない。

「そんなことないよ。あたしが水、張っといたから「たが[*22]」なんかこれっぽっちも緩（ゆる）んじゃいないよ。」
「んんー、こりゃな。包丁（ほうちょう）が錆び（さび）ちまって…」
「大丈夫（だいじょうぶ)、研（と）いであるから。油[*23]っ紙に包んでそこに置いてある。」

「んんー、わら[*24]、わらじ、…」
「買っといたよ。」
「んんー、なんだ、みんな揃（そろ）ってやがんのかあ。しゃあねえ、じゃあ、行ってくるか。」
「お前さん、けんかしないでね。」
「おう。」

「おうっ、おーら。ああー。」
「気をつけて。」
「おう、行ってくらあ。ああー、うわーっ、寒い。うわーっ、いやんなるなあ。ううー、あー。あー。あーあ、みんなが寝静まっている、こんな明け方[*25]（あけがた）に魚、仕入れ（しいれ）て売って歩いてさあ、いったいどれだけの儲け（もうけ）になるってんだい。うーお、あー。
　んんっ。おおっ、なんでえ、河岸、一軒（いっけん）もやってねえじゃねえか。河岸が休みなんてわけはねえんだが。おっ、切り通し[*26]（きりどおし）の鐘だ。…、一つ足（た）んねえ。かかあの野郎[*27]（やろう)、いっとき[*28]早く起こしやがった。いまいましい野郎だねえ、おい。ひっけえして[*29]張り倒して[*30]（はりたおして）やろうかなあ。んん、でもなあ、また張り倒してここへ帰って来なけりゃならねえしなあ。うん、しゃあねえなあ。浜へでも行って、時[*31]、かせぐかあ。おおー、寒い。ああー。

　ああー、いい匂い（におい）だ。おりゃあ、この潮[*32]（しお）の匂いが好きで魚屋になったようなもんだからなあ。へっ、へっ、へっ。
　ああー、夜が明けてきやがった。あっと言う間に明るくなりやがって、へっへっ。どう

＊22　たが：＊21「盤台」の説明中にある「たらい」の一部。横壁のための木片（適当に切りそろえられた木材）がばらばらにならないように、外側から締め付けるために使う。「たがが緩む」と、中に入れた水などが漏れやすくなる。

＊23　油紙：油を染み込ませた紙。物が錆びないために使う。この落語では、勢いよく言う感じで、「あぶらっかみ」と聞こえる。

＊24　わら：「わらじ」と言いたいのが、落ち着きが十分じゃないために、途中までになっている。「草鞋」については、＊78 を参照。

＊25　明け方：一日の中で、夜が明けて朝が来る少し前の頃。

＊26　切り通しの鐘：「切り通し」は、山を切り開いて通した道。穴で通せば「トンネル」だが、上まですべての土が取り除かれた様子を想像するとよい。

　＊14「芝」のあたりにこの切り通しがあり、その先には鐘（金属でできていて、叩いて音を出す物）が掛かっていた。そして、決まった時刻にその鐘を鳴らすことで、人々に時間を知らせていた。

＊27　野郎：「人」の意味の卑語（悪い言い方）。

＊28　いっとき：江戸時代は、一日 24 時間を十二の「時」に分けていた。したがって、この「一時」は、現在の二時間に相当する。

＊29 ひっけえして：「引き返して」を江戸っ子のように発音したもの。「き」が小さい「つ」になる、「かえ」が「けえ」のようになる、などの特徴を持つ。以下、同じようなパターンは多く出てくる。

＊30　張り倒して：「張り倒す」手のひらで相手の頭をたたいて倒すこと。

＊31　時、かせぐ：「時を稼ぐ」の「を」が抜けている。「時を稼ぐ」は、「何か別な事をしながら、危ない場面から逃げるための時間を作り出す」というのが現代の意味だが、ここでは、むしろ、「暇な時間をつぶす」というような意味になっている。

＊32　潮：海の水。

も、[*33]勝五郎（かつごろう）でございやす。今日も一日、よろしう、お頼（たの）もうします。ひっひっ、たまにゃいいもんだなあ、ふん。…、んんー、何だいありゃあ。」

[*34]波打ち際（なみうちぎわ）を見ますってえと、何やらゆらゆらゆらゆら揺（ゆ）れているものがある。何だろうと[*35]煙管（きせる）の[*36]雁首（がんくび）でもって、ぐうーっと引き寄せてみる。

「何だいこりゃ、[*37]おっそろしく[*38]きったねえ財布（さいふ）だ。んんー、なんでえ、ずいぶんと重いね、おい。砂かなんか入ってんのかね、こりゃあ。」

「[*39]おっかあ、開けろ。おっかあ。おっかあ。早く開けろ、おっかあ。」

「待っておくれ、今、開けるから。ちょいと待っててておくれ。ああ、驚（おどろ）いた。どうしたの、何かあったのかい。」

「誰か、誰かあとをつけて来ねえか、おめえ、こっち来て見てみろ。」

「えっ、誰かって。誰もいやしないよ。どうしたい、けんかでもして追っかけられて来たのかい。」

「そうじゃあねえ、おい。おいっ、おっかあ、ええっ、おめえ俺のことをいっとき早く起こしやがっただろう。」

「ごめんよ、お前さん、すぐ気がついて後（あと）を追ったんだけども。」

「そんなことは、どうだっていいんだい。河岸、行ったら店は開いてないし真っ暗だ。切り通しの鐘、聞いたらいっとき早いじゃねえか。[*40]しょうがねえ、浜、行って、時、かせごうと思って、ぼんやりと煙草（たばこ）、吸ってたんでえ、そしたら夜が明けてきやがってさあ。波打ち際に何やらゆらゆらゆらゆら揺れてる物があるんだい。こんなもん、浜に落ちてたい。」

「あら、おそろしく汚い（きたない）財布じゃないか。それ、何、[*41]銭（ぜに）か何か入ってるのかい。」

「…、見ろ。」

「ちょいと、お前さん、これ銭じゃないよ。[*42]二分銀（にぶぎん）ばかりじゃないかね。いくらあるんだよ。」

＊33　勝五郎：落語「芝浜」の主人公（話の中で一番中心の人）の名前。

＊34　波打ち際：海で、波が浜まで来てなくなる所。

＊35　煙管：タバコを吸うための道具。管（くだ）の先にタバコを入れる所があり、そこに火をつけて、反対の側から吸う。江戸時代によく使われていた。

＊36　雁首：＊35「煙管（きせる）」の先の部分。金属でできていて、９０度、折れ曲っている。

＊37　おっそろしく：「おそろしく」を江戸っ子のように強く言った話し方。また、ここでは、「とても」を強調した意味になっている。

＊38　きったねえ：「汚い」の江戸っ子的言い方。

＊39　おっかあ：直接の意味は、「おかあさん」。この落語では、夫が妻を呼ぶ言い方として使われている。

＊40　しょうがねえ：「しかたがない」の江戸っ子的言い方。

＊41 銭：銅（どう）や鉄など安い金属で作られた、価値（かち）の低いお金。ここでは特に、現在の「硬貨（こうか）（コイン）」のニュアンスで使われている。ただし、「お金」全体の意味で使われることもある。

＊42　二分銀：江戸時代に使われていたお金の種類。銀で作られており、＊41「銭」に対して現在の「お札（さつ）」のニュアンスがある。

「ちょいと、おめえ、数（かぞ）えてみな。」

「数えてみなったって、こんな、こんなお金。ええーっ、[*43]ひと、ひと、ひと、ひと、ふた、ふた、ふた、ふた、ふた、ええ、み、…」
「いくらあるんだよ。」
「ちょいと待っておくれよ。あたし、こんな大金（たいきん）、見たことないから。」
「こっち寄こせ、こっち。ええっと、ひと、ひと、ひと、ひと、ふた、ふた、ふた、ふた、み、み、み、み、よ、よ、よ、よ、…。おい、ちょうど、[*44]五十両（ごじゅうりょう）あるぜ。」
「五十両！うわあー、お前さん、大金じゃないか。あんた、これ、どうするの。」
「ふっ、ふっ、どうするもこうするもねえやな。ええっ、俺が拾（ひろ）って来たんだよー、俺とおめえがいただこうじゃねえか。おっかあ、[*45]運（うん）が向いてきたなあ。」
「どうするの。」
「こんだけの金がありゃあ、おめえ、遊んでて酒が飲めらあ、はっはっは。おっかあ、江戸中（えどじゅう）でこんだけの銭、持ってんのは俺らだけだい。」
「うん、そうだねえ。うん、そりゃあ、そうだけど。」

「何もゆうことねえってんだよ。これでおもしろおかしく暮らそうじゃないか。二人で[*46]おつな[*47]形（なり）してさ、楽しく暮らそうってんだよ。」

「うん、そりゃ、いいんだけど。お前さん、河岸、戻んなくていいのかい。」
「いいんだよお、これだけの金があるんだから、おめえ、何も働くことはねえやな。おう、運が向いて来たんだよ。それにな、俺一人が使おうってわけじゃねえんだい。おめえにだってさあ、何でも好きなもん買ってやろう、何でも好きなもん。うーん、よーし、じゃあ、おめえ、あしたになったら、着物[*48]あつらえろ、着物。人が見てね、びっくりするようなやつ、あつらえろ。[*49]十二単（じゅうにひとえ）に[*50]緋（ひ）の袴（はかま）かなんかで。」

「ばかなこと言ってんだよ。そんな物、恥ずかしくて着られやしないよ。じゃあ、このお金、私が預かっておこうかねえ。」
「そうかい、頼んだぜえ。」
勝五郎、飲み残しの酒をきゅうっとあおりますってえと、そのまま寝てしまいます。

＊43 ひと、ひと、ひと、ひと、ふた、ふた、ふた、ふた、…：「一つ、二つ、三つ、四つ、…」の「つ」が無い言い方。江戸時代には「イチ、ニ、サン、…」より、この数え方のほうが多く使われていた。

＊42「二分銀」は四枚（つまり、「八分」）で一両である。したがって、「ひと、ひと、ひと、ひと」で一両、「ふた、ふた、ふた、ふた」で二両、という数え方の表現になっている。

＊44　五十両：「両」は、江戸時代に使われていたお金の単位。「円」と単純に比べることはむずかしいが、落語に出てくるさまざまな物事の値段から推測するに、「一両」は現在の数万円程度の価値だと思われる。したがって、あとで勝五郎が「江戸中でこんだけの銭、持ってんのは俺らだけだい。」と言うが、勝五郎の生活水準を示すひと言である。

＊45　運が向いてきた：「運が向く」運がよくなること。

＊46　おつな：おしゃれな。「粋」が大衆的で身近なかっこよさなのに対し、「乙」は貴族的で上品なかっこよさである。

＊47　なり：かっこう。「おつななり」で、特に目立つようなおしゃれなかっこう。

＊48　あつらえろ：「あつらえる」の命令形。「あつらえる」は、「服などを、その人のために特別に作る」の意味。

＊49　十二単：いろいろな色の服を十二枚も重ねて着る服。平安時代（７９４年～１１９１年）に、天皇に近い階級の女性たちが着ていたぜいたくな服。

＊50　緋の袴：赤い色の袴。「袴」は腰から足までを隠すゆるやかな服で、「緋の袴」は神社にいる巫女（神社の仕事をする女性）などがよく着ている。

「お前さん、ちょいと、お前さん。」
「はい、おい、はい、えー。」
「さ、お前さん、夕河岸（ゆうがし）、行っておくれよ。」

「えー、夕河岸？何、ばかなこと、言ってんだい、えー。いいから、手[*51]ぬぐい、持って来い。」

手ぬぐい、肩に引っ掛けますってえと、そのまま湯[*52]へ行ってしまいます。入れ替わりに、

「こ[*53]んちは、酒屋です。」

「はい。何です。」

「いや、何だか知らないけど、か[*54]っちゃんがね、ちょいとめ[*55]でてえことがあったんで、三[*56]升（さんしょう）ばかり届けてくれってんでねえ。じゃあ、ここに置いておきますんで。へえ、毎[*57]度、ありがとうございました。」

「はい、どうも。」

「こんちは、てんぷら屋です。いや、何だか知らねえけどね、かっちゃんが何か祝[*58]い事（いわいごと）があったんでね、ちょいとあ[*59]つらえてくれってんで。ここに置いときますんで。毎度。」
「はい、どうも。」
「こんちは、うなぎ屋でーす。いや、何だか知らねえけど、かっちゃんがあつらえてくれってんで、ここに置[*60]いときやすんで。ありがとうございやした。」

「はい、どうも。」
「こんちは、魚屋です。」
「ちょっと待ってよ、うちは魚屋…」

「えっへへ、何だか知らないけど勝の野郎がね、めでてえ事があったんでって、鯛[*61]（たい）をあつらえてくれってんで。ここに置いときますんで。ありがとございやした。」
「はい、どうも。」
「こんちは。」

＊51　手ぬぐい：タオルと同じように、顔や体を拭く布(ぬの)。現在の一般的なタオルより、薄くて小さめである。

＊52　湯：ここでは、公衆浴場(こうしゅうよくじょう)（おおぜいの人がいっしょに入る大きなお風呂）を意味している。人が多く集まる公衆浴場は、江戸時代の人々にとって社交場(しゃこうじょう)の働きもあり、そこへ行くことは生活の中の楽しみの一つであった。

＊53 こんちは：「こんにちは」の「に」が抜けて短く聞こえるもの。さらに短くなると「ちは」ぐらいにしか聞こえない。

＊54　かっちゃん：＊33「勝五郎」のことを、親しい人が呼ぶときの言い方。

＊55　めでてえ：「めでたい」の江戸っ子的言い方。

＊56　三升：お酒の量(りょう)を言っている。「一升(いっしょう)」は1,8リットル（1800 cc）。

＊57　毎度、ありがとうございました：「毎度」は、いつもの意味。ただし、物を買ってもらったお店の人が使うお礼のあいさつとして、いつも買っているわけではなくても使われる。

＊58　祝い事：結婚式や誕生日など、おめでたい事をみんなで喜ぶためのパーティー。

＊59　あつらえてくれ：＊48「あつらえろ」と同じ動詞。ここでは、＊58「祝い事」のためにわざわざてんぷらを作ることを意味している。

＊60　置いときやすんで：「置いておきますから」を江戸っ子的に言っている。

＊61　鯛：魚の名前。料理したあとの赤い色が好(この)まれて、＊58「祝い事」で、たいへんよく使われる。この習慣は、現代でも一部に残っている。

「あら、[*62]六さん、いらっしゃい。どうしたの。」

「えっ、いや、何だか知らないんだけど、何だか知らないんです。勝の野郎がね、なんかちょいとうちでめでてえ事があったんで、おめえたちにはちょいと[*63]不義理（ふぎり）しちゃってるから、いいからいいから来てくれってんで、へえ、いや今日は、ちょいと、[*64]御馳走（ごちそう）になりやす。なあ。」
「えっ、へへ。ごちそうになります。」
「ごちそうさま。」
「ごちそうさま。」
「ごちそうさま。」
勝五郎が帰って来て、わあーっと酒を飲んで、野郎はそのまま寝てしまいます。

「ちょいと、お前さん。ちょいと、お前さん。」
「うっ、うっ。あー、よく寝たな、こりゃあ。あー、あれ、いけねえ。こいつはちょっと飲みすぎちゃったな、こりゃ。いけねえな、こりゃ。」
「さ、お前さん、河岸、行っておくれよ。」
「あー、河岸？なーにを言ってんだよ、おめえ、ええっ。なあんで俺が河岸に行かなきゃいけねえんだよお。あんだけの金があんだよ。えーっ、河岸になんて行くことあねえよ。」
「なんだい、あんだけのお金って。なあにい。」
「うっふふ。ほら、俺がほら、きのう、芝の浜で拾ってきたじゃねえかよ。あの金があんだよ、ふふっ。何もおめえ、働くことはねえやな。」
「なんだよ、その芝の浜で拾ってきたって。なあに？」

「はっはっはっ。[*65]とぼけてやがる。おらあ、おめえに起こされて、おめえ、きのう、芝の浜へ行ったんじゃねえか。切り通しの鐘、聞いたらいっとき早くてさ、うん。しゃあねえから浜、行って、時かせいでたんだい、ぼんやり。そしたら、夜がぱあっと明けてきてさあ、えー、へっへっ、波打ち際にゆらゆら揺れている物があったんだよ。革（かわ）の財布だよ。二人でおめえ、こうやって[*66]勘定（かんじょう）して、おめえ、そいで五十両あったんじゃねえかよ。あの金があんだよ。へっへっ。働くことなんかねえやな。」
「なんだよ、芝の浜で拾って来たって。なあに。」
「とぼけんじゃねえやな。おめえにやらねえとは言ってねえだろ。」
「いや、だから、なあに。」

＊62　六さん：勝五郎の友だちの名前。

＊63　不義理しちゃってる：「不義理（ふぎり）をしてしまっている」しなければいけないことをしないままになっている。ここでは、友だちとのつきあいを十分にしていない、という意味になっている。

＊64　御馳走になりやす：「ごちそうになります」たくさんの料理や飲み物をお金を払わずに食べさせてもらうこと。

＊65　とぼけて：「とぼける」知っているのに知らないと言うこと。

＊66　勘定して：「勘定（かんじょう）する」ここでは、数えるという意味。現代では、居酒屋などで食べ物・飲み物の代金を払うという意味で使うことのほうが多い。

「何だよ、おめえ。俺がきのう芝の浜で拾って来た、おめえ、五十両のことだよ。」
「何を言ってんだい、お前さん。お前さん、きのう、河岸になんぞ行ってくれなかったじゃないか。」

「[*67]行ってねえこたあねえやな。おめえに起こされて河岸、行ったんじゃねえか、ええっ。切り通しの鐘、聞いたらいっときほど早くてさ。しゃあね…」
「切り通しの鐘だったらここでだって聞こえるよ。ほら、今、ちょうど聞こえるよ。これ、[*68]明け六つ（あけむつ）だよ。」

「いや、そうじゃねえんだよ。ええっ、俺はおめえに起こされて…。」
「行ってくれなかったよお。いくら起こしたって、お前さん起きてくれなかったんじゃないか。夕方になって起きてくれたと思ったら、何だか知らないけども手ぬぐい肩に引っ掛けて湯に行っちまって。友だち大勢（おおぜい）わあっと呼んで、さんざん飲んで騒いで、そのまま寝ちまったんじゃないか、お前さん。いつ、河岸、行ったんだよ。」
「いや、行ってねえことはねえよ、ええっ。おりゃ、おめえに起こされて…」
「湯に行っちまったんだろ。」
「いやっ、いやっ、だからよ、湯は行ったよ。なっ、湯は行ったけど、湯に行く前におめえに起こされて…」

「行ってくれなかったよ。は、そいじゃ、お前さん何だか知らないけど、[*69]ゆんべ寝ながらにこにこにこにこにこ笑ってたよお。お前さん、夢（ゆめ）でも見たね。」
「ゆめえ？いやいや、そんな、そんなことはないよ。おまえ、ゆ、ゆ、そんなことはないよ、お前。ゆ、だって、俺はおめえに起こされて、おめえ、河岸、行ってさ。で、切り通しの鐘、おめえ、…、あっ、…、夢か、夢かよ、おい。夢か？ああー、夢か。[*70]そう言やあ、俺、[*71]がきの時分（じぶん）から[*72]やけにはっきりした夢、よく見たんだよ。あれ、夢か。ああ、夢か。ちょっと待ってくれよ、おっかあ。五十両、拾ったのは夢で、飲み食いしたのは、ほんとかよ。なんだよ、[*73]割（わり）に合わねえ夢、見ちゃった。」

「何をばかなこと、言ってんだよー。働きもしないで、酒ばっかり飲みたい飲みたい。金がほしいほしいなんて考えてるから、そんな夢、見るんじゃないか。情け（なさけ）ないねえ。どうすんだい、あの払い。どうすんの。」

「んんー、そんなに言うなよ、おまえ。おっかあ、俺が悪かった。この通りだ。ねっ、[*74]堪

＊67　行ってねえこたあねえやな：「行ってないことはないよ」

＊68　明け六つ：今の午前六時ごろ。「明け」は、「夜明け」の意味。

＊69 ゆんべ：「ゆうべ」の江戸っ子的言い方。「ん」の音がよく使われるのも、その特徴の一つとしてある。

＊70　そう言やあ：「そう言えば」

＊71　がきの時分：子どもの頃という意味。「がき」は、子どもの卑語。

＊72　やけに：「とても」を強調している言い方。非常にくだけた話し方。

＊73　割に合わねえ：「割に合わない」損と得をくらべて、損のほうが大きい。

＊74　堪忍してくれ：「堪忍する」怒らないで許すこと。

忍（かんにん）してくれ。ねっ、堪忍してくれ。」
「頭、下げられたって、困るんだよ。どうすんだよ、あの払い。」
「そんな言うなよ、お前。なんとか、ならねえかな。」
「なるよ、お前さん。」
「ほんとか。」

「あのぐらいの払い、お前さんが[*75]その気になって働いてくれりゃ、すぐに返せるんじゃないか。お前さん、お酒やめてさあ、一生懸命（いっしょうけんめい）働いておくれよ。ねえっ。」

「…、そうだなあ。こりゃきっと、お天道様のばちが当たったに[*76]ちげえねえんだ。俺、酒をやめる。俺、酒をやめるよ。酒、[*77]おめえに絶（た）つよ。酒、絶って、一生懸命働くよ。」

「ほんとかい。それじゃあ、河岸、行ってくれるかい。」
「うん。でもよお、二十日近くも商い休んじまったんだい、盤台なんど乾いちまって使いもんにならねえだろ。」
「そんなことないよ。あたしが水、張っといたから、たがなんかこれっぽっちも緩んじゃいないよ。」
「ああ、でも、ほらあ、包丁が錆びちまって…」
「大丈夫、研いであるから。油っ紙に包んでそこに置いてある。」

「[*78]草鞋（わらじ）が…」

「買っといたよ。」
「何か夢の中でも同じような事があったんだがなあ。わかったい。とにかく行ってくらあ。」
「お前さん、気をつけて。」

　さあ、それから勝五郎、心を入れ替えまして、一生懸命、商いに[*79]精（せい）を出すようなことになる。もともと[*80]目の利（き）く、[*81]腕（うで）のいい魚屋ですから、こういう人は河岸へ行っても人気があるというやつで、
「ちは。」

「おい、なんだい、えっ、どうしたい。しばらく[*82]鼻の頭、見せなかったじゃねえか。」

「すいません、ちょいとね。えへへへ、ずっこけちゃったんですよ。どうぞ、よろしくお

＊75　その気になって：「その気になる」話したことを本当に実現する気持ちになる。

＊76　ちげえねえ：「違いない」

＊77　おめえに絶つ：「おめえ」は、「お前」。自分が物事をやめる約束を相手に対してしている。

＊78 草鞋：江戸時代によく使われていた履物（はきもの）。藁（わら）（収穫した稲（いね）から米を採ったあとの茎（くき）を乾かした物）を編んで底の部分が作ってあり、藁で足にくくりつける。

＊79　精を出す：一生懸命（いっしょうけんめい）、働く。そのことを熱心にする。

＊80　目の利く：物がいいか悪いかを見てわかる能力が高いこと。

＊81　腕のいい：高い技術を持っていること。

＊82　鼻の頭、見せなかった：「鼻（はな）の頭」は、鼻の一番先の部分。その人の姿を見なかったことを、おもしろく言い表したもの。

願いします。で、何[*83]かありやすか。」

「え、まあ、いいや。見[*84]ねえ、いいの揃（そろ）ってらあ。」

「おお、なるほどー、おうおうおう、おおー、いいの揃ってるね。うんっ、これっ、いくら。」
「ふふふ、いくらってさ、ええっ、おめえの好きなようにしていいよ。」
「好きなようにたってっさ、いくら。あーあー、そうかい。えー、ちょっと高くて買いきれねえな。」

「いいよ、いいよ。おめえのこったい、まけてやるから。ああ、今、銭がなかったらな、またこの次でいいから。いいから、持ってけ、持ってけ。」[*85]
「そうかっ。ありがとうございます。」

なんてね、いい魚を安く仕入れまして[*86]、恥[*87]（はじ）をしのんで、お得意様[*88]（おとくいさま）の所へ持って行く。
「こんちは。」
「はい。ああ、うん、なんだい、勝さんか。なんだい。」

「あ、あのねえ、いい鯵[*89]（あじ）がへえった[*90]んですよ。」

「ふん、何を言ってやがんだい、おめえさん。えーっ、二十日もうちに来なきゃあねえ、ほかの魚屋がへえっちまってるよ。だあめだ、だめだ。いいから帰んな、帰んな。」

「旦那[*91]（だんな）、そんなこと言わねえでねえ、この鯵、ほんとに、うめえ[*92]んだ。もし、まずかったら、お代[*93]（おだい）、いりませんから。ここに置いときますんで。」

「おい。何やってんだ。」

　食べてみるってえと、やっぱり、ほかの魚屋とはひと[*94]味もふた味も違う。やっぱり勝五郎の魚はうめえな、ってんで、ひと月たたないうちに、取られたお得意様をみんな取り返してしまいまして。このお得意様が、「あのねえ、いい魚屋があるんですよ。」ってんで、別なお得意様を世話してくれる。どんどんどんどん忙しくなるってえと、もう稼[*95]（かせ）ぐに追いつく貧乏（びんぼう）なしってやつで、うーん、一年たった時には、義理[*96]の悪い

＊83　何かありやすか：「何か（いい魚が）ありますか。」仕入れるために、勝五郎が魚を見せてもらっている。

＊84　見ねえ：「見なさい」（→「見る」の命令形）

＊85　まけてやる：「まけてあげる」。「まける」は、今よりも値段を安くすること。

＊86　仕入れまして：「仕入れる」売ってお金を得るための物を買うこと。

＊87　恥をしのんで：はずかしい事を、そうだと知りながら、がまんしてすること。

＊88　お得意様：いつも買ってくれる客。

＊89　鯵：魚の種類。小型の魚で、刺身（さしみ）、フライ（油で揚（あ）げた料理）などで食べる。

＊90　へえった：「入った」。

＊91　旦那：目上の男性を呼ぶ呼び方。ここでは、物を売る人が、＊88「お得意様」を呼ぶ呼び方として使われている。現在では、妻が「夫」の意味で使う場合も多い。

＊92　うめえ：「うまい」。「おいしい」のくだけた言い方。

＊93　お代：「代金」のこと。物を売ったりサービスを受けたりした時に、それに対して払うお金。

＊94　ひと味もふた味も違う：「とても違う」という意味の慣用句（かんようく）。

＊95　稼ぐに追いつく貧乏なし：「稼（かせ）ぐ」は、仕事をしてお金を得ること。仕事をしてお金を得ていればお金がなくなって生活に困ってしまうことはない、という意味のことわざ。

＊96　義理の悪い借金：返さなければならない借金があるのに、返せないままになっていること。

借金（しゃっきん）がすっかりなくなった。二年たった時には、*97夏冬（なつふゆ）の物が揃って、わずかではございますが、*98貯え（たくわえ）もできた。三年たつかたたないうちに、今まで*99裏長屋（うらながや）の*100棒手振り（ぼてふり）だった魚屋が表通りに一軒の店を構（かま）えまして、「魚・御*101仕出し（おんしだし）料理　魚勝（うおかつ)」という看板を掲（かか）げまして、*102奉公人（ほうこうにん）を二人三人と雇（やと）うなんてえことになる。そりゃあもう、夢中でやったってやつでございますなあ。

　ちょうど三年たった*103大みそかの晩でございまして、

「おう、今、帰った。」

「おっ、こりゃ、*104親方。おかえりなさいまし。おう、親方のお帰りだ。」

「お帰りなさいまし。」

「お帰りなさいまし。」

「お帰りなさいまし。」

「ん、おう、誰だい、この盤台、積んだのは。んんー、こんなんじゃ、崩（くず）れちまうじゃねえか。ちゃんと積みなおしておけ。うん。おい、誰だ、*105出刃（でば)、重ねた野郎は。出刃、重ねる奴（やつ）があるかい。気をつけろ、んんー。直しておけ、すぐに。ふん。…、おっ、みんな、こっち来い。いい、いい、いいから、こっち来い。え、いいから、みんないいからこっち来い。こっち来い。うん、あのなあ、おめえたちもこれでなあ、今のうち、湯へ行って来い。うん、へへ、今日は大みそかだ。ゆっくりとな、一年の垢（あか)、落として来い。ええー、えっ、いいんだよ、店のほうは俺が、あとやっとくから。おっ、いいからゆっくり行って来いよ。かまわねえから、うん、みんなで早く行って来い。うん、行って来い、行って来い。ふっふっふっ、おい、どうしたんだ、*106政（まさ）は。おめえ、行かねえのか。」

「あのお、お長屋の*107熊（くま）さんのとこなんですが。」

「うん。熊さんのとこが、どうかしたのかい。」

＊97　夏冬の物：夏の生活に使う物（薄い服や薄いふとんなど）と冬の生活に使う物（厚い服や厚いふとん、火鉢など）のこと。つまり、日常生活のために必要なさまざまな物。

＊98 貯え：あとで使うために、集めて取っておくもの。ほとんどの場合、「貯金」の意味。

＊99　裏長屋：「長屋」は、長い造りの一つの家屋に薄い壁で隔てられたたくさんの部屋があり、それぞれの家族がそれぞれの部屋に寄り合って住んでいる建物。「裏長屋」は、その長屋の裏通り（あまり人が通らない道）側の部屋。または、裏通りに建っている長屋。つまり、そこに住んでいるということは、都市の中で特にお金のない生活をしている人であることを示している。

＊100　棒手振り：棒の両側に付いている＊21「盤台」に魚を入れて担ぎ、売って歩く。物を売る仕事としては、もっとも単純な形態。

＊101　仕出し：お客からの注文を受けて料理をし、それを届けること。

＊102　奉公人：やとわれて仕事をしている人。

＊103　大みそか：１２月３１日のこと。「みそか」は各月の月末を意味し、「大みそか」は更にその最後の意味。お金などの貸し借りがある場合、この日が返済の期限となるのが通例であった。

＊104　親方：その人にとって親のような人という意味の語。ここでは、＊102「奉公人」が、主人を呼ぶ呼び方として使われている。

＊105　出刃：「出刃包丁」刃が厚く広く、魚や肉を大きく切るために使う大型のナイフのような道具。

＊106　政：人の名前。「政五郎」を短く言ったものか。

＊107　熊さん：人の名前。「熊五郎」が落語によく出てくる名前。

「あの、[*108]お勘定、取りに行ったんです。そしたら、おかみさんが、どうにもならないから堪忍してって。なんとか払っちゃもらえないかねって言いましたら、もうどうにもならないから堪忍して、堪忍してって。涙（なみだ)、ぼろぼろぼろぼろ流しながら、堪忍して、堪忍してって。」

「ふっ、何を言ってやんだ、おめえ。ねえから払えねえんじゃないか。[*109]ありゃあ、払えるんだよ。んんー、今、払えねえってんだったらな、また[*110]来春（らいはる)、行けやいいんだよ。春、行ってだめだったら、夏、行け。夏、行ってだめだったら、秋、行って、秋に払えねえったら、また来年の大みそかに行きゃあいいんだい。おめえがそんな事で[*111]くよくよしてちゃしょうがねえやな。いいから、おめえも早く湯に行って来い。ふ、ふ、ふ。」

「おっかあ、今、帰った。」
「おや、おかえんなさい。どうだったい、湯は。」

「ああ、まるで[*112]芋（いも）を洗うようだよ。ううん、おめえも早いとこ行ってきたほうがいいぜ。」
「ごめんなさい。お前さんには悪いんだけど、あたしもう昼間に入っちゃったの。」

「ああ、そうか。そりゃ、いい。おお、なんだい、いい匂いがすると思ったら、[*113]畳（たたみ)、張り替えた（はりかえた）のか。へええ、いいねえ、いやあ、まるで部屋の中がぱあっと明るくなったようだね。ええっ、へへ、昔（むかし）の人はうめえこと言ったよなあ、[*114]畳の新しいのと女房（にょうぼう）の、…、女房は古いほうがいいけどもな。へっ、へっ、へっ、へっ。それよりも、うち、おめえ、[*115]借金取りは来ねえのか。」

「なにを言ってんだよお、うちのほうから取りに行くようなことはあったって、向こうから取りに来るようなことはないやね。」
「へえ、そうかい。ええー、はっはっはっ、そうか。へええ、こんな大みそかがあるんだねえ、おい。ほおお、ありがてえなあ、そりゃあ。ふっふっふっ、おりゃあ、ありゃいつだったっけなあ。ありゃ、大みそかだよ、もうどうにもならなくてさあ。次から次へと借金取りが来らあな。んんー、おめえが[*116]いいあんばいに、みんな追い返してくれてたっけ。

＊108　お勘定：ここでは、買った魚の代金でまだ払っていない分のお金、の意味。

＊109　ありゃあ：「（もし、お金が）あれば」

＊110　来春：来年の春。

＊111　くよくよして：「くよくよする」何かを気にして元気がない様子。

＊112　芋を洗うようだ：「芋（いも）」はさつまいものことで、人を芋に例（たと）えている。人がたくさんいて混み合っている様子を表現した慣用句。

＊113　畳、張り替えた：「畳（たたみ）を張り替える」畳の表面に張ってあるござを新しい物に替えること。小さなぜいたくの一つ。

＊114　畳の新しいのと女房の：「畳と女房は新しいほうがいい」という慣用句を言いかけて、やめた。

＊115　借金取り：借金を取りに来る人。

＊116　いいあんばいに：強すぎず弱すぎず、ちょうどいい程度ですること。

俺は[*117]押入れ（おしいれ）の中に入っておとなしくしてたんだい。もう借金取りは一人も来ねえ、やれやれってんで、俺が押入れから出てきたら、ほら、[*118]薪屋（まきや）の爺（じい）さんだよ、んんー。[*119]矢立（やたて）、忘れたってんで取りに帰って来ただろ。もう逃げる所がねえ、もうどうしようって言ってたら、おめえがとっさにそばにあった[*120]風呂敷（ふろしき）を頭にぱあっとかぶせてくれた。俺はその風呂敷の中でじいーっとしてたんだい。んん、そしたら、おめえ、薪屋の爺さんだよ、んん、おかみさん、今夜はばかに冷（ひ）えるんですねえ。ご覧（らん）なさい、風呂敷までがたがたがたがた震（ふる）えてますよ、って言われたときには、俺、風呂敷の中で真っ赤（まっか）になっちゃったよ。へへ、[*121]粋（いき）な爺さんだよ、あいつはなあ。

　ああ、ありがと、ありがと。ええっ、なんだい、こりゃ。[*122]福茶（ふくちゃ）か。ふっふっふっ、あんまり、うめえもんじゃねえなあ、こりゃな。」
「あのね、お前さん、あたしがこれから言うことを何にも言わず、黙（だま）って聞いておくれかい。」
「うーん、ふふ、なんだい、あらたまって。」
「だから、で、これからあたしが話すことを、おしまいまで、何にも言わず、黙って聞いておくれかい。」
「うん、ふっ。なん、なんだい。」
「…、お前さん、この財布、見覚え（みおぼえ）がないかい。」
「ええー、うーん、おっそろしく、きたねえ財布だねえ。ええっ、ふーん、なんだい、これ、銭でもへえってるのか。」
「五十両、入ってんの。」
「五十両！へええ、女は怖い（こわい）ねえ。わずかの間にそんなにやったか。」
「そんなんじゃないんだよお。二分銀ばかりで五十両、その財布、見覚えがないかい。」
「うーん、ええと、そう言われてもー、…。うーん、ちょいと、わからねえな。」
「そう。じゃあ、お前さん、それ出してちょいと数えてごらんよ。」
「なあに言ってんだ、おめえ。五十両って、わかってんだろ。数えることは…」
「いいから数えてよ。」
「ふん、おかしな野郎だ。五十両って、わかってて、おめえ。なんだ、おめえ、わあー、ほんとだ、二分銀ばかりじゃねえか。ええー、ひと、ひと、ひと、ひと、ふた、ふた、ふ

＊117　押入れ：ふとんなどを入れるための大きな棚。中を見えなくするための戸が付いている。

＊118　薪屋：「薪」は、燃やして燃料にするために適当な大きさに切られた木。それを売る商売の人のこと。

＊119　矢立：江戸時代に使われた携帯用の筆記具。墨と筆を入れる入れ物があり、着物の帯に差し込んで持ち運ぶ。

＊120　風呂敷：物を包むための四角い布。江戸時代に物を運ぶためのもっとも一般的な道具。

＊121　粋な：かっこいい。＊46「おつな」の項、参照。

＊122 福茶：昆布や黒豆、梅干などを入れて飲むお茶。＊103「大みそか」や正月などに、お祝いの意味で飲む。

た、ふた、…、よ、よ、よ、よ、いつ、いつ、いつ、いつ、とお、…、五十両、確（たし）かにあるぜ。」
「その五十両ね、お前さんが、三年前に、芝の浜で拾ってきた五十両だよ。」
「ええっ。おっ、あれっ。おっ、…、あれっ、だけど、おめえ、あれは夢じゃないのか。」
「あたしが夢と言って、[*123]だましたの。」
「やっぱり、そうか。やっぱり、そうか。だって、おめえ、あんなにはっきりした夢ってのはねえもん。どーも様子（ようす）がおかしいと思って、冗談（じょうだん）じゃねえや。おめえ、どうしてあんなこと言って、だましやがったんだい。」
「[*124]おしまいまで聞いてくれ、お前さん。あん時ね、夢にするしかなかったんだよ。お前さんが芝の浜でその五十両、拾って来て、どうするんだいって聞いたら、おりゃあ、もう、こんだけの金がありゃあ、遊んでて酒が飲める。河岸、戻（もど）んなくていいのかいったら、おりゃあ、もう、働かねえって。遊んで暮らすんだって、そのまま[*125]寝ちまった。あたし、そのお金を持って、すぐに[*126]大家（おおや）さんところに行ったの。そしたら、大家さんが、たとえ一分（いちぶ）の金だって、拾ったものを使っちまえば、[*127]手が後ろに回っちまう。まして、五十両ってえ大金だ。もしそれを使えば、お前のところの[*128]亭主（ていしゅ）の[*129]首は胴（どう）に付（つ）いちゃいない。そのお金は俺が[*130]奉行所（ぶぎょうしょ）へ届（とど）けておくから、お前は亭主のほうをなんとかしろ、なんとかしろって、いったいどうすりゃいいんです。そうだ、あいつにな、夢だと言って、だましてしまえって言われて。お前さんを起こして、あれは夢だった、五十両拾ったのは夢だったって、そう言ったら、お前さん、どういう育ちをしてんのか、やけに素直（すなお）で、ああ、そうだそうだ、夢だ夢だって。それから、お前さん、まるでほんとに[*131]人が変わったように一生懸命働いてくれた。一年たった時に、[*132]落とし主（おとしぬし）が現れなかったからって、この五十両、[*133]お下げ渡しになったの。あたしね、あたしすぐに、すぐにお前さんに見せようと思ったんだけど、あたし、怖かった。今その気になって一生懸命働いてくれてるお前さんが、もし、この五十両を見て、もとの通り、働かなくなっちまったら、

＊123　だました：「だます」うそを言って、本当ではない事を相手に信じさせること。

＊124　おしまい：終わり。

＊125　寝ちまった：「寝てしまった」。

＊126　大家さん：＊99「裏長屋」の説明にあった「長屋」のオーナー（その物を所有している人）。

＊127 手が後ろに回っちまう：「手が後ろに回る」悪い事をした結果として、警察（けいさつ）などに捕（つか）まえられること。

＊128　亭主：「夫」のくだけた言い方。

＊129　首は胴に付いちゃいない：首と胴（どう）が切り離されるという意味。この場合、つまり、「死刑（しけい）になる」ということ。

＊130　奉行所：現在の裁判所（さいばんしょ）に相当する所。

＊131　人が変わったように：行動が変わって、まるで別な人になったように。

＊132　落とし主：落とし物の持ち主（ぬし）。

＊133　お下げ渡し：＊130「奉行所」に預けてあったお金が、拾った人に、その人のものとなって戻（もど）ってくること。

酒ばかり飲んで、働かなくなっちまったら、そう思うと、あたし怖くて言えなかった。でもね、三年たってお前さんの料[*134]簡（りょうけん）がすっかり変わって、今、この五十両のお金、いや、たとえ百両や千両のお金を見せたって、お前さん、もう変わるような人じゃあないと思ったから、よし、今夜は見せようって思って、昼間っから心に決めてたんです。お前さん、連れ添う（つれそう）女[*135]房（にょうぼう）にだまされて、くやしいでしょ。腹[*136]が立つでしょ。ですから、気[*137]の済（す）むまで思いっきりぶ[*138]つなり蹴（け）るなりしてください。その代わり、そういう訳（わけ）でだましたんですから、そのあとできっと、許してくださいね。この通りです。」

「…、どうぞ、お[*139]手をお上げなすって。へえー、おめえは、え[*140]れえなあ。おめえは、えれえ。おりゃあ、そんなことも知らねえで、なさけねえなあ。おっかあ、堪忍してくれ。この通りだ。堪忍してくれ。」

「お前さん、ぶたないのかい。」

「何を言ってやがんだ、おめえ。おめえ、なぐってみろ、俺は腕[*141]（うで）が曲がっちまうわな。おめえがそうやってだましてくれたおかげでもって、俺たちは今、こうしていられるんだい。ありがてえ、ほんとうにありがてえ。おめえはー、女房大[*142]明神（だいみょうじん）だなあ。そうだ、おめえは女房大明神だなあ。女房大明神、女房大明神、女房大…」

「やだよお、拝（おが）んだりして。それじゃあ、お前さん、許してくれるのかい。」

「許すも許さねえも、こっちが、おめえ、お礼、言いてえんじゃねえか。」

「そう。ああー、よかったあ。お前さんが許してくれなかったら、あたしどうしよかと思って。ああ、なんか体じゅうの力が抜けちまったようだよ。そうだ、お前さん、ちょいと待ってて。」

「なんだい。なんだい、んんっ。なんでえ、これ、おめえ、酒か。」

「うん、今日、この話をしたら機[*143]嫌直し（きげんなおし）に一[*144]杯やってもらおうと思って、昼間っから仕度（したく）してあったの。」

「うん、だけどさ、おりゃあ、酒はおめえに絶ってんだよ。」

「だからさ、私が許すから。お飲みよ。」

「いや、いいや、いいや。せっかく、今まで飲まなかったんだから。ね、やっぱり、これ

＊134　料簡：ものの考え方。

＊135　女房：「妻」のくだけた言い方。

＊136　腹が立つ：怒(いか)りを感じるという意味の慣用句。

＊137　気の済む：怒りがなくなること。

＊138　ぶつ：「叩(たた)く」の口語(こうご)（話す時だけ使う語）的な言い方。

＊139　お手をお上げなすって：「手を上げる」あやまる意味で床(ゆか)に手をついている人が、その行為(こうい)をやめて、普段(ふだん)の姿勢(しせい)に戻ること。それを敬語で言っている。

＊140　えれえ：「偉(えら)い」多くの人が感心するような立派(りっぱ)な行動ができること。

＊141　腕が曲がっちまう：「腕(うで)が曲がる」悪い事をした＊20「ばち」として、腕が正常な状態でなくなってしまう。

＊142　大明神：本来は、神様の名前。しかし、人の名前の後ろにつけて、その人への尊敬の意味を示す場合が多い。ここでは、「女房」の後につけて、女房への感謝や敬意を表している。

＊143　機嫌直し：嫌(いや)な気持ちになったのを解消(かいしょう)するためにする行為。

＊144　一杯やってもらおう：「一杯、やる」お酒を飲むこと。

は、もう。」

「大丈夫。お前さん、もう[*145]お酒に飲まれるような人じゃない。今夜は大みそか、あしたはお正月、お休みじゃないか。ねっ、お飲みよ。」

「…、そうか、…、いただくか。うん、ああ、いいやいいや。この[*146]湯呑（ゆのみ）で、この湯呑で。…、ありがと、…。そうだ、おめえも一杯、飲まねえか。」
「あたし、お酒、飲めないから。」

「いいんだ、いいんだ。飲めなくたっていいんだ、飲めなくたって。[*147]口、つけるだけでいいんだ。[*148]形だけでもいいんだ。な、飲まねえか。」

「そう。…、ありがとう。」
「おおっ、へへへ。…、この匂いだあ、なつかしいなあ、おい。えっ、へっへっへっへっ、どうもごぶさた致（いた）しまして。ええ、まあ、おめえとは、もう生涯（しょうがい）つきあわねえと思ったんだが、またつきあうようなことになっちまったい。ふふ、これからもよろしく頼むぜ。ふっふっふっ。[*149]除夜（じょや）の鐘だ。新しい年が来らあな、こりゃ。はい、じゃあ、……、やめた。」

「どうしたの。やっぱり、あたしの[*150]お酌（おしゃく）じゃあ。」

「いやあ、そうじゃねえ。また、[*151]夢になるといけねえから。」

＊145　お酒に飲まれる：「お酒を飲む」の受身文。すなわち、お酒を飲んでいる人が飲んだり飲まなかったりを自分で決められなくなくなってお酒を飲み続けてしまい、お酒のほうが人を動かしているような状態になっていること。

＊146　湯呑：お湯やお茶を飲むための小型の陶器のコップ。

＊147　口、つける：「口をつける」本当に飲食するのではなく、食べ物や飲み物をほんの少しだけ食べたり飲んだりすること。

＊148　形だけ：するふりをして、実際にはしないこと。

＊149　除夜の鐘：１２月３１日の晩から午前０時をまたいで１月１日まで、多くの寺々で鐘（かね）をつき続ける風習。煩悩（ぼんのう）（人の心の中にある悪い考えの元（もと））をなくす意味で、１０８回、つかれる。

＊150　お酌：相手のコップにお酒をついであげること。

＊151　夢になるといけねえ：「夢になると困る」という意味。